

島根県の近代化遺産



島根県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書

2 0 0 2

島根県教育委員会

島根県の近代化遺産



2 0 0 2

表紙写真／旧 JR 大社駅全景（大社町）

扉写真／興雲閣（松江市）

題字／周藤陽子（東出雲町）



隠岐郷土館（五箇村）



田野家住宅（松江市）



大森鉾山清水谷製錬所跡
(大田市)



出雲グンゼ(株)
(出雲市)



旧広浜鉄道橋脚
(浜田市)



出雲日御碕灯台（大社町）



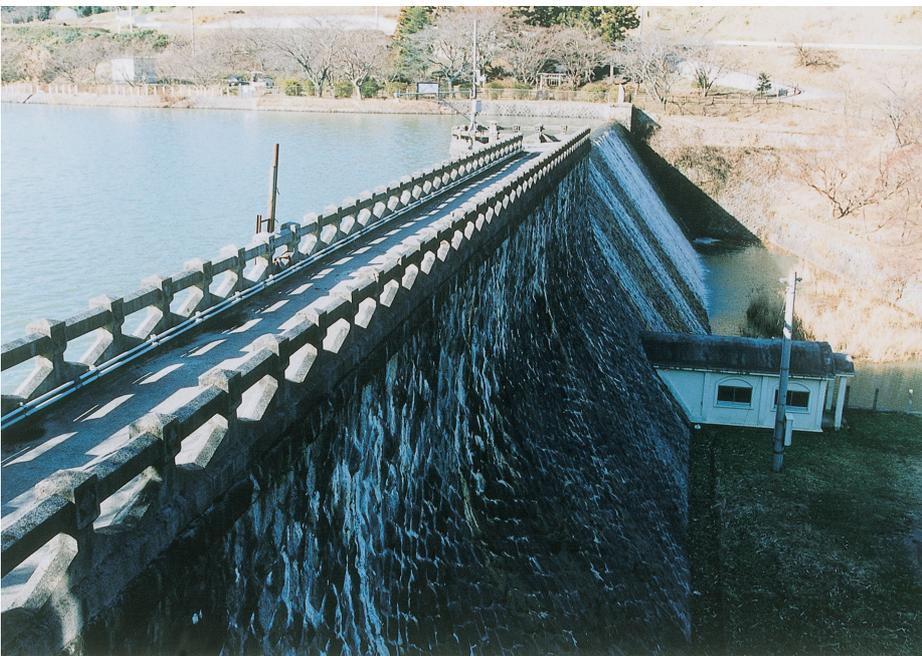
神戸堰堤（出雲市）



JR 山陰本線
島田川暗渠
(安来市)



掛戸の潮止め水門
(大田市)



千本貯水池及び弁室
(松江市)

序

島根県教育委員会では、平成12・13年度に「島根県近代化遺産総合調査」を実施いたしました。

本書は、2年間の調査結果をまとめたものであります。日本の近代化に貢献した県内に所在する産業・交通・土木に関する構築物について調査し、基礎資料を作成することができました。

この成果が県内の近代化遺産に対する理解を深め、歴史的遺産として地域作りの一助となれば幸いです。

なお、調査の実施にあたりご指導いただきました文化庁文化財部建造物課をはじめ、現地調査と報告書作成にご協力いただきました調査委員と調査員ならびに地元市町村教育委員会に厚くお礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました所有者並びに地元関係者に対しまして心からお礼申し上げます。

平成14年3月

島根県教育委員会

教育長 山 崎 悠 雄

例 言

- 1 本書は、鳥根県教育委員会が平成12・13年度に文化庁の国庫補助事業として実施した「鳥根県近代化遺産（建造物等）総合調査」の調査報告書である。
- 2 本書の執筆は、調査委員・現地調査員と事務局が分担した。担当者名は、各文末に記した。
- 3 調査目的・調査経過・調査組織等については、調査概要の項目にかかげた。
- 4 概論編では、建築・産業・土木をテーマとして、概観し、まとめた。
- 5 個別解説編では、鳥根県を代表する109件の近代化遺産の事例を紹介した。
個別解説編の掲載順序は、原則として、調査項目分類表の順番、続いて市町村建制順とした。しかし、編集の都合上、一部変更したものもある。
- 6 個別解説編のタイトルには、原則として、遺産の名称・分野・所在地・竣工年等をかかげた。しかし、分野によっては、構造形式・沿革等をかかげたものもある。
- 7 資料編では鳥根県の近代化遺産の総括一覧表を掲載した。
- 8 参考文献は、原則として、執筆項目ごとに文末に示した。
- 9 本報告書掲載写真は調査委員・調査員及び事務局が撮影・作成した。表紙の写真ほかは武智正信の撮影に係る。その他の写真は撮影者・提供者・引用文献を示した。
- 10 本報告書掲載の図面については、その出典・所蔵先・提供者を示した。
- 11 本書の編集は、馬場俊介先生の指導を得て、鳥根県教育庁文化財課で行った。

目 次

序

例言

目次

島根県近代化遺産（建造物等）総合調査概要

概 論 編

1	島根県の近代化	内田 融	10
2	島根県の近代産業	相良 英輔	12
3	島根県の近代建築	和田 嘉宥	13
4	島根県の近代土木	馬場 俊介	15

個別解説編

1	JA 西いわみ鎌手支所 (旧鎌手村産業組合)	24	22	たたら角炉伝承館(旧榎原鉦角炉)	48
2	深山池堰堤	25	23	(株)安来製作所ワイエスエス鳥上木炭銑 工場角炉(旧(株)安来製鋼所鳥上分工場)	49
3	麴屋蠟板場	26	24	大和紡績(株)出雲工場(旧出雲製織(株))	50
4	折居漁港東防波堤及び西防波堤	27	25	出雲ゲンゼ(株)(旧郡是製糸(株)今市工場)	51
5	笹利山根家長屋門	28	26	オーエム製作所(株)宍道工場 (旧出雲製織(株)宍道工場)	52
6	大森鉦山清水谷製錬所跡	30	27	(株)石西社 (旧生糸販売購買組合連合会石西社)	53
7	大森鉦山トロッコ道	31	28	國暉酒造(有)醸造蔵	54
8	大森鉦山旧藤田組三木工場跡	32	29	米田酒造貯蔵蔵	55
9	大森鉦山坑道	33	30	森山醤油醸造桶	56
10	鰐淵鉦山鉦石搬送電車軌道橋脚	34	31	カラコロ工房(旧日本銀行松江支店)	57
11	鰐淵鉦山石膏選鉦場跡	35	32	(株)藤忠ビル	58
12	来待石石切場跡	36	33	尾原ビル(旧尾原呉服店)	59
13	大森鉦山永久工場施設群	37	34	ミヤワキ(旧宮脇洋品店)	60
14	大森鉦山永久坑溶解場煙道	38	35	川口屋	61
15	都茂鉦山選鉦場跡	39	36	三階ホテル(旧三階楼)	62
16	中国電力(株)乙立発電所(旧出雲電気(株))	41	37	旧安来銀行	63
17	中国電力(株)豊川発電所(旧出雲電気(株))	42	38	旧矢上銀行江津支店	64
18	一畑電気鉄道(株)布崎変電所	43	39	長命館(旧村上旅館)	65
19	中国電力(株)湯村発電所(旧出雲電気(株))	44	40	旧山陰合同銀行仁万支店 (旧静岡商業銀行仁万出張所)	66
20	中国電力(株)窪田発電所(旧出雲電気(株))	45			
21	中国電力(株)匹見発電所 (旧匹見川水力電気工業(株))	47			

41	旧山陰合同銀行矢上支店 (旧矢上銀行本店)	67	77	JR 木次線坂根スイッチバック	117
42	服部商店(旧市山興業銀行)	68	78	JR 山陰本線田儀トンネル及び石垣	118
43	益田市歴史民俗資料館(旧美濃郡役所)	69	79	旧 JR 大社駅(旧国鉄大社駅)	119
44	町並み交流センター(旧大森区裁判所)	70	80	一畑電気鉄道(株)出雲大社前駅 (旧大社神門駅)	123
45	石見銀山資料館(旧邇摩郡役所)	71	81	JR 山口線津和野駅機関車転車台	124
46	旧川合郵便局	72	82	松江大橋 (県道母衣町雑賀町線 大橋川)	125
47	旧江津町役場	73	83	神立橋(国道9号線 斐伊川)	126
48	旧郷田郵便取扱所	74	84	高角橋(国道9号線 高津川)	127
49	旧八川郵便局	75	85	羅漢町橋(市道銀山線 銀山川)	128
50	前田アパート(旧温泉津郵便局)	76	86	大久トンネル(町道飯田大久線)	129
51	旧邑智町役場庁舎	77	87	武良トンネル(県道旧中村津戸港線)	130
52	本郷会館(旧二川郵便局)	78	88	初代福浦トンネル(旧南方36号線)	131
53	津和野町役場(旧鹿足郡役所)	79	89	二代目福浦トンネル(南方36号線)	132
54	布施村公民館(旧布施村役場)	80	90	馬島灯台	133
55	隠岐郷土館(旧周吉外三郡役所)	81	91	神戸堰堤(神戸川)	134
56	興雲閣	83	92	泊り鼻防波堤(五十猛漁港)	135
57	清涼山源光寺	86	93	掛戸の潮止め水門	136
58	横田相愛協会(旧救世軍横田小隊会館)	87	94	美保関灯台	138
59	大平精米所(旧桜尾座)	88	95	美保関灯台ビュッフェ (旧美保関灯台宿舎)	139
60	津和野カトリック教会	89	96	出雲日御碕灯台	140
61	湯町公民館(旧松江農林学校本館)	90	97	吉浦港防波堤	141
62	松江南高校宍道分校 (旧宍道尋常高等小学校)	91	98	古湊漁港北防波堤	142
63	シルバーシャツ製造(株) (旧直江中学校体育館)	92	99	那久岬の救済塔	143
64	大社高校いなさ会館 (旧制島根県立第三中学校講堂)	93	100	船引運河	144
65	瑞穂町武道館(旧田所小学校講堂)	94	101	忌部浄水場調整井室1～6号	145
66	津和野幼稚園	95	102	旧床几山配水池	146
67	崎民俗資料館(旧崎小学校)	96	103	千本貯水池堰堤及び弁室	147
68	西ノ島町立美田小学校 (旧美田尋常高等小学校)	97	104	大馬木川の砂防堰堤	149
69	田野家住宅(旧田野医院)	98	105	藤乃湯旧館	150
70	旧千原医院	101	106	元屋の石垣	151
71	旧畑迫病院	102	107	松江工業高校トレーニング場 (旧歩兵63連隊覆練兵場)	153
72	島根の鉄道橋梁	103	108	浜田高校第二体育館・浜田市立第一中 学校屋内運動場 (旧歩兵21連隊関連施設)	154
73	旧広浜鉄道(今福線)施設群	110	109	陸上自衛隊出西訓練場 (旧海軍大社基地関連施設群)	155
74	JR 山陰本線島田川暗渠	112			
75	一畑電気鉄道(株)検車庫	115			
76	JR 木次線出雲横田駅	116			

島根県近代化遺産（建造物等）総合調査概要

1 目的

近代の産業・交通・土木に関する建造物については、現在までに文化財的保存の措置がほとんど取られていない状況にあるばかりでなく、全県的な所在調査も十分に行われていない。しかし、これらの貴重な文化財も、技術革新や産業構造の変革、経済効率の問題などにより、取り壊しや改変が進行している。したがって江戸時代末期から第二次世界大戦終結時までに、島根県の近代化の過程で造られた工場・炭田などの産業関係、駅舎や石橋・灯台などの交通関係、溜池などの土木建造物及びこれらと一体となって保存されるべき施設や備品等について早急に、形態・意匠等の特徴や実情について、総合的な調査を実施し、保存措置を講ずるための基礎資料作成を目的とする。

2 事業主体

島根県教育委員会

3 調査期間

平成12～13年度（2か年）

4 調査対象

- 近代的手法によって造られた建造物（各種の構築物、工作物を含む）で、産業・交通・土木等に係わるもの。
- 江戸時代末期から第二次世界大戦終結時までに造られたもの。
 - 産業関係 農業、林業、水産業、工業、商業等各種産業施設
 - 交通関係 鉄道施設（駅舎・トンネル・倉庫等）、道路施設（道路橋・トンネル等）
 - 土木関係 港湾施設、ダム、発電施設、上下水道施設等
 - その他 金融・教育文化等に係わる構築物及び

これらと一体となって保存されるべき備品等

5 調査体制

（1）調査委員会

学識経験者6名からなる島根県近代化遺産（建造物等）総合調査委員会を組織し、事務局を島根県教育庁文化財課に設置した。

調査委員会は具体的調査対象、方法等を決定し調査指導を行うこととした。

（2）調査員

特別調査員 特定の物件にかかる調査・指導のため若干名の学識経験者を委嘱した。

現地調査員 市町村を単位とした近代化遺産の悉皆調査を実施するため、各市町村教育委員会の推薦に基づき62名の現地調査員を委嘱した。

これらの調査組織は以下のとおりである。

「近代化遺産総合調査事業」調査委員

(委員長) 馬場 俊介	岡山大学教授	土木史、風景論
斎藤 英俊	東京国立文化財研究所 国際文化財保存修復協力センター	建築
和田 嘉宥	米子工業高等専門学校教授	建築
脇田 祥尚	島根女子短期大学講師	建築、地域計画
森口 保	松江工業高等専門学校講師 島根県産業考古学会会長	産業
相良 英輔	島根大学教授	歴史（近代史）

特別調査員

小西 純一	信州大学工学部助教授	鉄道橋梁
-------	------------	------

現地調査員

氏名	勤務先等	調査区域
森口 保	松江工業高等専門学校講師	松江市
成相 脩	建築風土記研究会 主宰	松江市
乾 隆明	松江市文化財保護審議会 委員	松江市

氏名	勤務先等	調査区域
宮本 徳昭	島根県文化財保護指導委員	浜田市
永田 滋史	出雲市文化財審議会 委員	出雲市
今岡 清	島根県文化財保護指導委員	出雲市
渋谷 宏文		益田市
篠原 亨		益田市
勝部 昌正		大田市
足立 正智	安来市文化財保護委員の会 委員	安来市
松田 忠幸	江津市文化財研究会副会長	江津市
河原喜久夫	平田市文化財審議会 会長	平田市
山本 弘	鹿島町文化財保護審議会 委員	鹿島町
石川 光男	島根町文化財専門委員	島根町
錦織 慶樹	美保関町教育委員会	美保関町
松本 浩	東出雲町教育委員会	東出雲町
石倉 文晴		八雲村
片岡 詩子	玉湯町教育委員会	玉湯町
大山 英男	島根県文化財保護指導委員	宍道町
池田 浩	八束町公民館	八束町
藤原 久良	広瀬町文化財専門委員	広瀬町
梶谷 範敏	文化財専門委員	伯太町
千原 祥弘	仁多町教育委員会	仁多町
安部 英	横田町文化財専門委員	横田町
松田 勉	大東町文化財審議会 委員	大東町
太田 潔	加茂町文化財審議員	加茂町
浅沼 博	木次町文化財専門委員	木次町
藤原 豊善	三刀屋町社会教育指導員	三刀屋町
杉原 文昭	吉田村文化財保護審議会 委員	吉田村
岡田 幸夫		掛合町
今田 昭二	頓原町誌編纂室長	頓原町
山碕 昭三		赤来町
持田 享一		斐川町
佐々木敬志	佐田町文化財調査員	佐田町
石飛 赳	多伎町文化財専門委員	多伎町
春日 弘	湖陵町誌編纂室	湖陵町
稲根 克也	大社町教育委員会	大社町
多田 房明	温泉津町立温泉津小学校	温泉津町
児島 久友		仁摩町

氏名	勤務先等	調査区域
河部 吉	川本町文化財保護審議会 委員	川本町
藤原 昊	邑智町文化財保護審議会 副会長	邑智町
唐溪由美子	大和村教育委員会	大和村
日高 亘	羽須美村文化財審議会 副会長	羽須美村
吉川 正	島根県文化財保護指導委員	瑞穂町
藤田 典幸	石見町文化財保護審議会委員	石見町
山田 栄康	桜江町文化財保護審議会 委員	桜江町
宇川 徳美	町誌編纂委員	金城町
佐伯 充男	旭町文化財保護審議会委員	旭町
佐々木 誠	弥栄村教育委員会	弥栄村
永田 博	三隅町文化財審議会 委員	三隅町
領家 哲也		美都町
栗田 美文	匹見町埋蔵文化財調査室	匹見町
百合本修司	津和野町文化財保護審議会 委員	津和野町
村上 進	日原町文化財保護審議会 委員	日原町
村上登志雄		柿木村
末岡 仁志	六日市町文化財審議会委員	六日市町
横田 芳光	島根県文化財保護指導委員	隠岐島後
八幡 賢一	隠岐島後文化財保護審議会 委員	隠岐島後
田邑福太郎		海士町
真野 享男	西ノ島町文化財保護審議会 委員	西ノ島町
山本 英樹	知夫村教育委員会	知夫村

事務局

島根県教育庁文化財課

課長 勝部 昭
課長補佐 小田 時通 (平成12年度)
藤原 弘
田中 敏夫
文化財係長 若槻 真治 (平成12年度)
主任主事 原 明彦 (平成12年度)
主任主事 小原 拓生
主事 栗栖 明知

6 調査の経過

(1) 平成11年度の調査

①市町村教育委員会及び関係機関の協力により所在状況調査(事前調査)を実施し、事前調査票を作成する。その結果、486件の報告を受ける。

(2) 平成12年度の調査

- ①事前調査票をもとに一次(予備)調査を実施し、732件の報告を受ける。
- ②調査委員会で一次調査結果の分析検討を行い、重要物件の選定を行う。
- ③報告書の構成について協議する。

(3) 平成13年度の調査

- ①重要物件の現地調査を行う。
- ②調査結果を報告書としてとりまとめ刊行する。

7 報告書の執筆と編集

この報告書の執筆と編集は、以下の分担により実施した。

執筆者（個別解説編のみ、50音順）

足立正智、安部 登、安部 英、池橋達雄、石飛 越、今岡 清、犬山英男、大国晴雄、岡崎秀紀、岡崎雄二郎、尾川隆康、小野田滋、片岡詩子、片倉愛美、勝部 昭、勝部昌正、河原喜久夫、吉川 正、倉井雄一、栗栖明知、後藤玉樹、河野敏弘、小原拓生、篠原 亨、渋谷宏文、滝中茂、仲野義文、中西一郎、成合 脩、日野

実、平野久雄、真野亨男、松田忠幸、宮澤明久、宮本徳昭、村上 進、百合本修司、横田芳光、若槻真治

事業略年表

平成12年度

8月25日 現地調査員説明会

11月17日 第1回調査委員会議

・一次調査の結果について分析検討を行うとともに、今後の二次(実地)調査の進め方を協議した。

3月29日 第2回調査委員会議

・一次調査の結果、リストアップされた732物件について分析検討する。
・報告書の編集方針及び構成について協議する。

平成13年度

11月28日 第3回調査委員会議

・報告書執筆及び監修の分担を決定し、報告書執筆要領（構成・表記など）について最終確認する。

島根県近代化遺産総合調査分類表

分野	種別	具 体 例	分類 番号
第一次 産業	農 業	堰堤、ため池、井戸、用水路、水門、取水・揚水・排水施設、水車、試験場、集産所、加工所	1
		精米所、事務所、倉庫、組合、果樹関係施設、獣害防御施設	
	林 業	事務所、製材所、集材所、貯木場、森林軌道、橋、隧道、詰所、倉庫	2
	漁 業	漁港施設、水産加工施設、船だまり、ドック、捲上小屋、倉庫、試験場	3
	牧 畜	牧場、牧柵、酪農施設	4
	養 蚕	蚕室、蚕業試験場、蚕種製造所、倉庫	5
第二次・ 第三次 産業	製鉄鑄物業	工場、事務所、反射炉、倉庫、設備	1
	織 維	紡績、製糸、織物、染色、縫製、工場、事務所、倉庫、試験場、設備	2
	製 紙	工場、試験場	3
	醸 造	酒造、醤油造、麴造、工場、酒蔵、事務所、倉庫、店舗、設備	4
	窯 業	煉瓦窯、磁気・陶磁窯、事務所、倉庫	5
	商 業	銀行、店舗、旅館	6
	そ の 他	工場、事務所、倉庫、設備	7
公 共	鉱 業	鉱山、採掘地、事務所、電煉場、製品倉庫、分析所、製罐工場、選鉱場、溶鉱場、鑄物場	1
		資材倉庫、坑道、送風場、油田、採石場	
	電 力	発電所、変電所、送電施設、鉄塔、導水路、放水路	2
	鉄 道	トンネル、駅舎、軌道、鉄橋、機関車、客車、車両、事務所、ホーム、倉庫、工場、操車場、官舎	3
	道 路	橋梁、橋脚、トンネル、洞門、切り通し、石碑、地下道、人道橋、石畳、擁壁、石垣、石柱、自動車	4
	水 運	埠頭、棧橋、灯台、税関、倉庫、船倉、運河、船江、船堀、水門、造船所(船大工)、ドック、船舶	5
		堰堤、堤防、護岸、水はね、放水路、閘門、樋門、水門、伏越	
		防波堤、防潮堤、消波堤、護岸、潮切堤	
	水 道	水源地、取水場、浄水場、貯水槽、貯水池、配水場、ポンプ室、ダム、管理事務所、水道、水路	6
		放水路、水門、沈砂池、沈殿池、揚水機場	
	治 水	砂防堰堤、堤防、護岸、放水路	7
	行 政	官公庁、郵便局、石門	8
文 化	公民館、教会、迎賓館、公園、町並	9	
教 育	学校、石門、石柱、奉安殿、倉庫	10	
医 療	病院、医院	11	
産業組合	事務所、倉庫、集会所	12	
その他	生 活	洋館、石垣、公衆浴場、託児所、火葬場	1
	軍 事	飛行場、塹壕、弾薬庫、射撃演習場、防空壕、地下施設、土塁	2
	そ の 他	碑、像	3

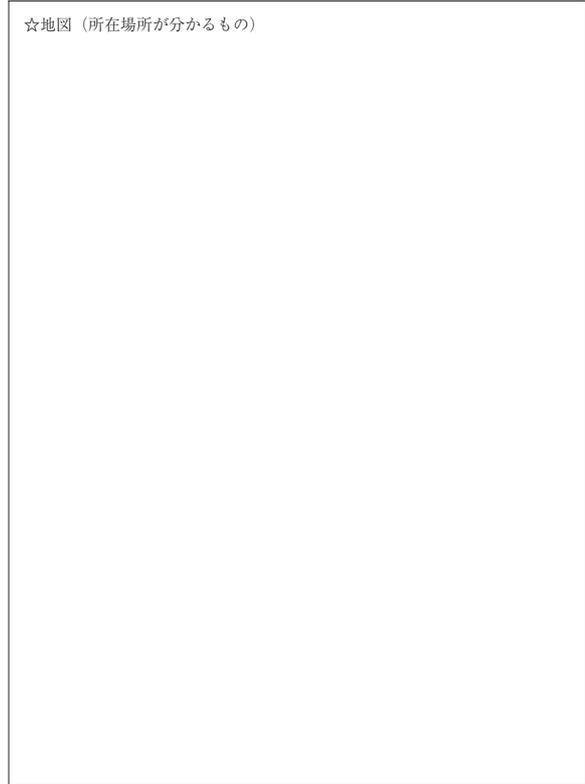
島根県近代化遺産総合調査票（予備調査）

名称	
旧名称 (用途・目的)	
所在地	
所有者(管理者)	
構造	木造・鉄筋コンクリート・鉄骨・レンガ・石造・土造・その他()
規模	階数(), 平面規模 約()m×()m
意匠	
竣工年月日	明治・大正・昭和 年 月 日(頃)
保存状況	良好・普通・不良・その他()
現在の利用状況	
付属資料	付属の道具・機械・設備・棟札、設計図面・設計書、その他() 有・無
関係資料	文献、図面・古写真・文書等
備考(特徴等)	
※分類	[分野] [種別]
調査員氏名	

※分類は、別紙分類表により記入してください。 ☆裏面に地図を添付してください。

(表)

☆地図(所在場所が分かるもの)



(裏)

調査票様式

島根県近代化遺産総合調査票(予備調査)

NO. 22

名称	興業閣 (松江郷土館)
旧名称	
(用途・目的)	
所在地	松江市殿町城山
所有者(管理者)	松江市 (教育委員会 文化財産)
構造	木造・鉄筋コンクリート・鉄骨・レンガ・石造・土造・その他()
規模	階数(2)、平面規模 約()m×()m
意匠	
竣工年月日	明治・大正・昭和 36年 9月 10日(頃) 江戸期、明治に移築
保存状況	良好・普通・不良・その他()
現在の利用状況	郷土館として公開
付属資料	付属の道具・機械・設備・棟札、設計図面・設計書・その他() 有・無
関係資料	分類、図面・古写真・文書等
備考(特徴等)	南方系のヴェランダと、北方系の下見板の構成が面白い
※分類	[分類] その他 [種別] 文化
調査員氏名	森口保、乾隆明、成相脩

※ 分類は、別紙分類表により記入してください。 ☆裏面に地図を添付して下さい。

☆ 地図(所在が分かるもの)

NO.22



調査票の記入例

1 島根県の近代化

近世の出雲国は松江藩とその支藩である広瀬、母里の3藩、石見国は東から石見銀山領（天領）、浜田藩、津和野藩、隠岐国は幕府からの預かり地として松江藩の支配のもとにあった。

幕末維新时期、大村益次郎が率いる長州軍は、松江藩や紀州藩を主力とする幕府軍を益田において一蹴し、浜田城も落とした。大政奉還を待たずに浜田藩領、石見銀山領を支配下に置いた。隠岐島では水若酢神社宮司忌部正弘ら神官庄屋たちが、武装した島民4千人を率いて松江藩の郡代を追放して島民による自治政府を樹立する。後に隠岐騒動と呼ばれるこの自治政権は、新政府の命で松江藩によって鎮圧されるまで80日間維持された。幕末動乱期に孤島で繰り広げられたこのドラマについての説明は未だ進んでいない。騒動から翌年にかけて、新政府の神仏分離政策に応じて、他地域では見られない徹底的な廃仏毀釈が行われた。島内の寺院、仏像のほとんどがこのとき破壊された。

松江藩は親藩であったこともあり、勤王の立場の明確化が遅れたことから、西園寺公望を総督とする山陰道鎮撫使の取り調べを受けることになった。

石州口の戦いで長州軍の通過を黙認した津和野藩は、小藩ながら早くから藩校である養老館を充実させ、国学や洋学など学問を重んじ、人材の育成に努めた。その結果、西周（洋学啓蒙学者）や森鷗外を輩出した。また、藩主亀井茲監や大国隆正、福羽美静らは維新政府の初期に中央にあって復古的な祭政一致政策を推進する中心勢力となった。

隠岐騒動の結果、全国に先駆けて明治2年（1869）隠岐県が設置された。石見の長州藩支配地には大森県が置かれ、後に県庁を浜田に移して浜田県となる。明治4年の廃藩置県で松江県、広瀬県、母里県が成立する。同年この3県と隠岐県を併せて島根県となる。隠岐はその後鳥取県に属したこともある。明治9年からは今の鳥取県を併せて島根県とされた。島根県の現在の県域が確立したのは明治14年であった。

学制、太陽暦、徴兵令、地租改正など新政府は次々と各般にわたる改革を推進する。中央集権的な近代国家の体制が整えられる一方、反政府運動も活発化

する。西南戦争以後は国会開設を求める自由民権運動として全国的に展開される。県下でも山陰自由党、石陽自由党、石見立憲改進黨などが組織された。明治15年、松江の山陰自由党関係者によって「山陰新聞」が創刊された。その後に発行された「松陽新報」とともに、長くこの地方の論壇をリードした。

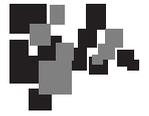
明治5年に学制が公布され、翌年に平田小学校、雑賀小学校（松江）が開校する。以来県下各地に小学校が開設される。明治8年には初の県立学校として教員伝習校（師範学校）が開設され、明治9年には松江中学校も開校する。その後、島根県医学校や私立の松江法律学校なども開設された。明治23年にはラフカディオ・ハーン（小泉八雲）を松江中学校に招聘した。明治30年代には女学校、農林学校、商業学校、さらには図書館などが全国的にも決して遅くない時期に開設を見ている。

道路改修、道路網の整備は明治初期から取り組まれた。不安な世情のなか、広島鎮台との連絡を容易にするという治安上軍事上の要請もあった。松江—山口街道、宍道—三次街道、浜田—広島街道の3路線の改修は松方デフレの不況のなか、県会の反対を押し切って明治17年に着手し24年まで、総工費90万7千円余を費やして完了した。

近世以来交通運輸の中心であった海上交通は近代に入っても引き続いた。松江周辺地域は中海、宍道湖にたくさんの定期航路が運航していた。出雲と石見を結ぶのも、京阪神と結ぶのも大阪商船会社等による下関回りの日本海航路が多く利用された。明治39年に県の補助を受けた境港—舞鶴間の定期航路が開設され、阪鶴丸が就航し京阪神への時間的距離を大幅に短縮させた。

鉄道開設運動は明治20年代から始まるが、30年代の山陰鉄道期成同盟の請願により本格化する。明治41年ようやく米子—松江間が開通、43年に出雲今市まで、45年に大社までが開通する。出雲今市以西はさらに遅れ、浜田までが大正10年、下関までの山陰線全面開通は昭和6年までかかる。鉄道の開通は経済のみでなく、政治や文化にも大きな影響を与えた。

古くから中国山地一帯で盛んであった鉦製鉄業は



洋鉄におされて大正10年前後にはすべて閉鎖することになった。また、大森銀山、笹ガ谷鉱山をはじめとして県下には多くの鉱山が稼働していた。大森銀山は藤田組によって、笹ガ谷鉱山は「銅山王」堀藤十郎が経営し、施設や技術の近代化が図られ、明治から大正期に最盛期をつくった。しかし一方では、周辺地域への鉱害の被害が問題化されはじめたことも重なり、次第に衰退していくことになった。

養蚕と製糸業は明治初期から強力な奨励と指導が行われた。明治30年ごろから県下各地に製糸工場がつくられ、代表する産業に成長した。が、日清・日露戦争を経て資本主義化、工業化の進む中で、東京や大阪から遠く離れた島根県は、工業発展から取り残されることなる。

地域産業の工業化が振るわないなかでは、農林水産業が産業の中心にならざるを得なかった。明治初期から先覚的な指導者や、農事試験場の指導によって農業生産力向上のためにさまざまな工夫が図られ、努力が払われてきた。

島根の戦前の農業を特色づけたものに地主制がある。全国的にも地主制が進んだ地域であったが、明治10年代のデフレや米価の上昇等によってその傾向は強まり、20年代には県下の耕地の半分が小作地であった。鈿製鉄に従事した中国山地の山林地主や松江市、簸川郡に住む少数の人々が50町歩、100町歩の小作地を所有し、島根県の政治、経済にも大きな影響を及ぼしていた。

大正3年に始まった第一次世界大戦に参戦したわが国は、戦時特需により工業生産を飛躍的に増大させた。製造業、金属工業は戦争前と比べて30倍もの急成長を遂げた。県下でも安来製鋼等の製鉄業、造船業に成長が見られた。同時に物価の急騰もとどまるところを知らない状態が続いた。このため大正7年夏、全国各地で米騒動が勃発する。県下でも浜田町（現浜田市）で米商人等が襲撃される騒動が発生している。

全国的にもこの後、社会主義政党や労働組合、農民組合が多数結成され、工場ストライキや小作争議が活発化し社会問題化する。県下でも同様である。

昭和4年の世界恐慌は深刻な農業恐慌、農村不況

をもたらし、県下をも直撃することになる。6年には満州事変に始まる日中戦争に突入し、その後15年にわたる戦争の時代を迎える。

浜田の歩兵第21連隊、松江の歩兵第63連隊は中国大陸や南方戦線に出動、各地を転戦した。21連隊は明治20年に創設、その後31年に営舎を浜田に移し、63連隊は明治38年に創設された。いわゆる郷土部隊である。

終戦直前の昭和20年、本土決戦用に簸川郡出西（現斐川町）には海軍航空基地が突貫工事で建設された。この基地は県下では数少ない空襲の標的となった。

戦後の驚異的な高度成長の過程では、島根県を含む地域は「裏日本」としての位置づけを余儀なくされ、経済発展の後進性に加えて過疎化という新たな深刻な課題をも負うことになった。19世紀末から1世紀以上、県人口は70万から90万人の間で推移し、現在減少傾向をみせている。もちろんこれに対して手をこまねいていたばかりではなかった。英知を集め、克服する努力を続けてきた。「島根の近代史は、後進性に対する挑戦の歴史であった」といわれる所以である。

これらすべてが——古い家中屋敷もその庭も——永遠に消えてしまうのにそう長い歳月を要しないだろう。すでにわが家の庭よりも広くて美しい庭が数知れず田んぼや竹やぶに変わってしまった。そして古風な出雲の町も、長い間の懸案だった鉄道が——たぶんあと十年を待たずして——開通すれば、膨張し、変貌し、月並みの町になって、この地所を工場や製作所の用地に転用せよと言い出すだろう。ここだけではない、日本の全土から、昔ながらの安らぎと昔ながらの趣が消え去るのは免れぬ定めらしい。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）がこの文章を書いたのは明治25年。戦争の惨禍、さらにブルドーザーが日本列島を縦横無尽に席卷し、ハーンの危惧したとおりになった。しかし、当たらなかったこともある。ハーンの住んだ家は工場に換わることもなく、愛した庭とともに当時のまま保存されている。

（内田 融）

2 島根県の近代産業

島根の産業概観

島根の近代産業としては、まず近世期以来の伝統産業である鉱山業を挙げなければならない。鉱山業には砂鉄を原料とした鉦製鉄業と、銅の採掘・精練がある。鉦製鉄業は飯石、仁多、能義3郡を中心に近世初期から盛んであったが、近代以降鉄鉱石を原料とした溶鉱炉による洋鉄に押されて衰退していき、大正後期にはほぼ衰滅した。銅山の主なものとしては、八束郡の宝満山、畑ヶ迫（現、津和野町）の笹ヶ谷鉱山、大森鉱山（現、大田市）があり、明治、大正期に盛況であった。明治43年島根県内務部『島根県商工業概要』によると、各鉱山の職工人員と労働人夫の合計は、宝満山鉱山481人、大森鉱山682人、笹ヶ谷鉱山315人となっている。さらに近世期からの伝統的な産物としては雲州木綿がある。楯縫、出雲、神門の3郡を中心に展開していた綿作を背景に木綿織物業は盛んであった。近代以降、大都市の大資本による企業に押されて衰退を余儀なくされたが、出雲地域にはいくつかの機械紡績業、木綿織物業が残った。

明治以降新しく起こった近代産業の代表は、製糸業である。近代以降盛んになった養蚕業を背景に明治末には、50人以上の従業員を抱える大工場が、松江地域や簸川郡を中心に展開した。

このほか、鉦製鉄業の衰退に替わり発展していったのは、鉦製鉄業の燃料である炭の生産技術を生かした家庭燃料用木炭業である。木炭生産は、鉦製鉄業の盛んであった飯石郡、仁多郡を中心に展開するが、この地域の木炭は大衆需要の黒炭で、邑智郡では高価な白炭生産が盛んであった。ともあれ、島根県の木炭は明治期から全国有数の生産を誇った。

また、瓦や粗陶器を生産した陶業も島根を代表する産業である。瓦は那賀郡の江津や浜田で生産され

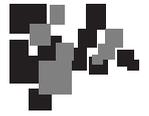
た石見瓦（石州瓦）、八束郡の古江、出雲の大津などで生産された出雲瓦が主なものである。生活用品である粗陶器は、水甕、播鉢、植木鉢、土管などであるが、「丸物」と総称され、江津、浜田、出雲の大津などで盛んに生産されていた。

それでは、島根県を代表する近代産業として製糸業を少し詳述してみたい。

近代産業としての製糸業

『旧松江藩引継款、明治5年出雲国物産表』（島根県庁蔵）によると、生糸、木綿の生産は楯縫、出雲、神門の3郡で大きな比重を占めている。製糸業は近代以降急激に発展した産業である。「島根県統計」によると、明治30年の養蚕家戸数は3万戸、収繭高15万貫、桑畑3000町歩であるが、大正5年になると、養蚕農家3万9000戸、収繭高92万貫、桑畑5500町歩となっている。明治20年には機械製糸による生産が始まっている。同41年の『第二次殖産十年計画』によると、県下総生産額の6割は機械による生産、4割が座繰ないし足踏器による生産となっている。『島根県商工業概要』によると、明治43年島根県工場総数の半分を超える53が製糸業である。なかでも従業員50人以上の大工場が16を数える。地域別工場数をみると、簸川郡に35、松江市に19があった。平田町（現、平田市）には県下第一の規模を誇る平田両全株式会社の3製糸場があった。3工場とも従業員100人以上の規模を持っていたが、大正5年に米子製糸合名会社に吸収・合併され、同9年には日本製糸株式会社（ニホンレーヨン）になった。羽二重、緋も島根の代表産物である。羽二重生産は明治25年松江蚕業株式会社で始められ、益田、津和野でも製織された。緋は能義郡広瀬町を中心に明治30年代に黄金時代を築いた。

（相良英輔）



3 島根県の近代建築

和風色が強い島根の近代建築

島根県はラフカディオ・ハーンが「日本民族の揺籃の地」と呼んだように神話の時代から古い歴史を誇り、中央とも深い交流を保ちながら独自の文化を育んできた。明治40年の皇太子山陰行啓に際して、鳥取の仁風閣が西洋式（ルネッサンス様式）で造られたのに対して、松江の興雲閣（p.83～85）（明治36年）は擬洋風ながらも和風が基調になっている。出雲大社の存在は近代建築に対しても影響力を与えている。出雲大社神苑の拡張に対応して大正13年に建て直された旧 JR 大社駅（p.119～122）（県指定文化財）は建築当時「大社本殿に形どった純日本式木造」とも言われていた。明治から大正にかけて郡役所が各地に造られるが、旧周吉ほか三郡役所（現隠岐郷土館；明治18年）、旧邇摩郡役所（p.71）（現石見銀山資料館；明治33年）、旧鹿足郡役所（p.79）（現津和野町役場；大正8年）、旧美濃郡役所（p.69）（現益田市歴史民俗資料館；大正10年）など現存する郡役所の遺構は全て和風表現である。伝統を重んじる気風は島根県全県に浸透していたと思われる。

近代建築として島根県内でもっとも古い建築遺構は松江市苧町にある旧田野医院（p.98～100）（明治4年?）である。この建物は苧町病院として建てられた県内最古の病院建築である。入母屋屋根や土蔵造は伝統的であるが、開口部の半円アーチや建物四隅の石積み風な仕上げは明らかに西洋風であり、全国的に見ても病院建築としては最古の遺構であろう。

官公庁の建築以外では、銀行建築や商業建築に新しい建築様式が現われる。島根県農工銀行（明治31年；現存せず）は2階建の木造建築だが、フレンチ・ルネッサンスを基調とし、外観には柱形を張り出し、入り口上部の円塔が印象的だった。一方では、町並みに合わせた土蔵造の銀行建築が登場する。山陰合同銀行の前身松江銀行本店（明治36年）は土蔵造の擬洋風建築で、正面車寄せの柱や軒蛇腹の繰形などに、擬洋風の手法が伺える建物だった。同様の銀行建築としては明治37年建築の第三銀行今市支店が

あった。

昭和になると鉄筋コンクリート造の建築が登場する。御大典を記念して造られた松江商工会議所（昭和4年；現存せず）は正面の外部階段を意匠に取り入れて、セセッションや表現主義を意図した外観で新しい時代の到来を告げるものである。一方、旧日本銀行松江支店（現カラコロ工房；昭和13年）は本格的な古典様式の建築で、重厚な姿を今も堀川に写している。

道路や海上航路は比較的早くから発達する。安来銀行本店（大正3年；現存せず）は大阪の業者が請け負い、煉瓦などの主要材料はすべて大阪から舞鶴経由で阪鶴丸によって運搬された。

山陰における鉄道建設はやや遅れる。従って島根県下の駅舎の建築は大半は大正以降のものである。その中で、代表的な遺構はやはり旧大社駅や出雲横田駅（p.116）（昭和9年）である。一畑軽便鉄道は、大正3年に今市～平田間が開通し、昭和2年に電化して今市～北松江間が全通し、さらに昭和5年には川跡～大社間を開通させ、現在に至る。鉄筋コンクリート造の大社神門駅（p.123）（昭和5年）はアールデコ調の駅舎として特異である。

海上航路の水先案内として建てられた灯台にも特筆すべきものがある。島根県の島根半島の両端にはそれぞれ聳える出雲日御碕灯台（p.140）（明治36年）と美保関灯台（p.138）（明治31年）とがある。日御碕灯台は高さが39メートルあり、東洋一といわれる。石造円形の平面は内側を煉瓦積で壁が二重にするなど、構造的な工夫も見られる。美保関灯台は高さは低いですが、建築年は日御碕灯台より5年古く、吏員退息所（p.139）（現在美保関灯台ビュッフェ）も現存している。

教会建築にも特筆すべきものがある。日本基督教団横田相愛教会（p.87）（大正12年；登録文化財）と津和野カトリック教会（昭和4年；登録文化財）である。相愛教会は、当地のキリスト教求道者岡崎喜一郎（明治29年同志社卒業）が、私財を投じて建てた教会堂である。施工にあたった内田武之助は、刑務所服役中に習得した洋風建築技術を、この教会建築に捧げたという。町内後田の武家屋敷地内に建つ

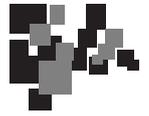
3 島根県の近代建築

津和野カトリック教会は、単塔形式のゴシック様式である。外装はモルタル塗のため、細部は簡略化されているが、ゴシックの基本形態はよく表現されている。

最後に教育施設について触れておく。島根県下各地では、明治5年の学制の頒布に伴い、小学校が創設されるが、最初は、私塾や寺院を転用しながら開校された。その後、順次、新校舎が造られるが、いずれも木造であった。県下には旧寺領尋常高等小学校（現木次町健康の森集会施設；大正13年）や粕淵小学校講堂（昭和2年）など大正末や昭和初期の木造校舎の以降が幾つか残っている。旧制中学校は、

明治8年5月17日に教員伝習校予科教師桃好裕等の建言書が発端となって松江の教員伝習所に変則中学校が併設され、9年3月18日から開校となっている。これが後の島根県第一中学校で、明治13年7月に那賀郡浅井村（現浜田市）に第二中学校が、明治33年に杵築町（現大社町）に第三中学校が開校する。大社高校いなさ会館（登録文化財）は旧制第三中学校講堂（明治34年）の一部である。学校建築も和風を基調として造られていたことが現存遺構によって伺える。

（和田嘉宥）



4 島根県の近代土木

[1] 島根の近代化と土木遺産

全国の近代土木遺産の調査・分析が進むにつれ、そこには都道府県によって大きな違いのあること、また、幕末・明治初期、明治中・後期、大正期、昭和戦前期のように、時期によって大きく左右されることも明らかになってきた。それは、封建制社会から近代社会への離脱の状況が都道府県によって大きく異なっていたことと、年代に応じて加速もしくは減速される分野が都道府県によって全く異なっていたことに起因している。そして、それらの背後には、旧藩時代の上級武士・庄屋・豪商の意向、県令・知事の施政方針、県吏や住民の近代化に対する意識、介入した技術者の技量や好み・人脈といった人的要因に加えて、地理的な位置、外国との関わりの度合、気象、地形・地勢、材料の供給、既往の産業、交通（海路・陸路）の便などの様々な因子が複雑に絡み合っ

て介在している。中国地方について見ると、山陽側の3県については、近代土木遺産から見る限り（かなり単純化した議論となるが）、岡山が「農業」、広島が「軍」、山口が「産業」に特化した発展過程を辿ったと概観することができる。同じ瀬戸内にありながら三者三様の様相を示していることは、非常に印象的な結果であった。しかし、山陰側の2県については、近代化のプロセスの特徴が何であったかよくわからない、というのがこれまでの正直な見方であった。今回、島根県の近代化遺産総合調査に参画して県内に現存する重要な土木遺産のリストを大まかに眺められるようになって、「島根とは何か」は曖昧模糊としていた。そこで試みに、県内の近代土木遺産を明治、大正、昭和の3期に分けて地図上にプロットしてみた（図-1）。すると、ようやく地域性らしきものが浮かび上がってきた。以下、それについて述べよう。

明治期

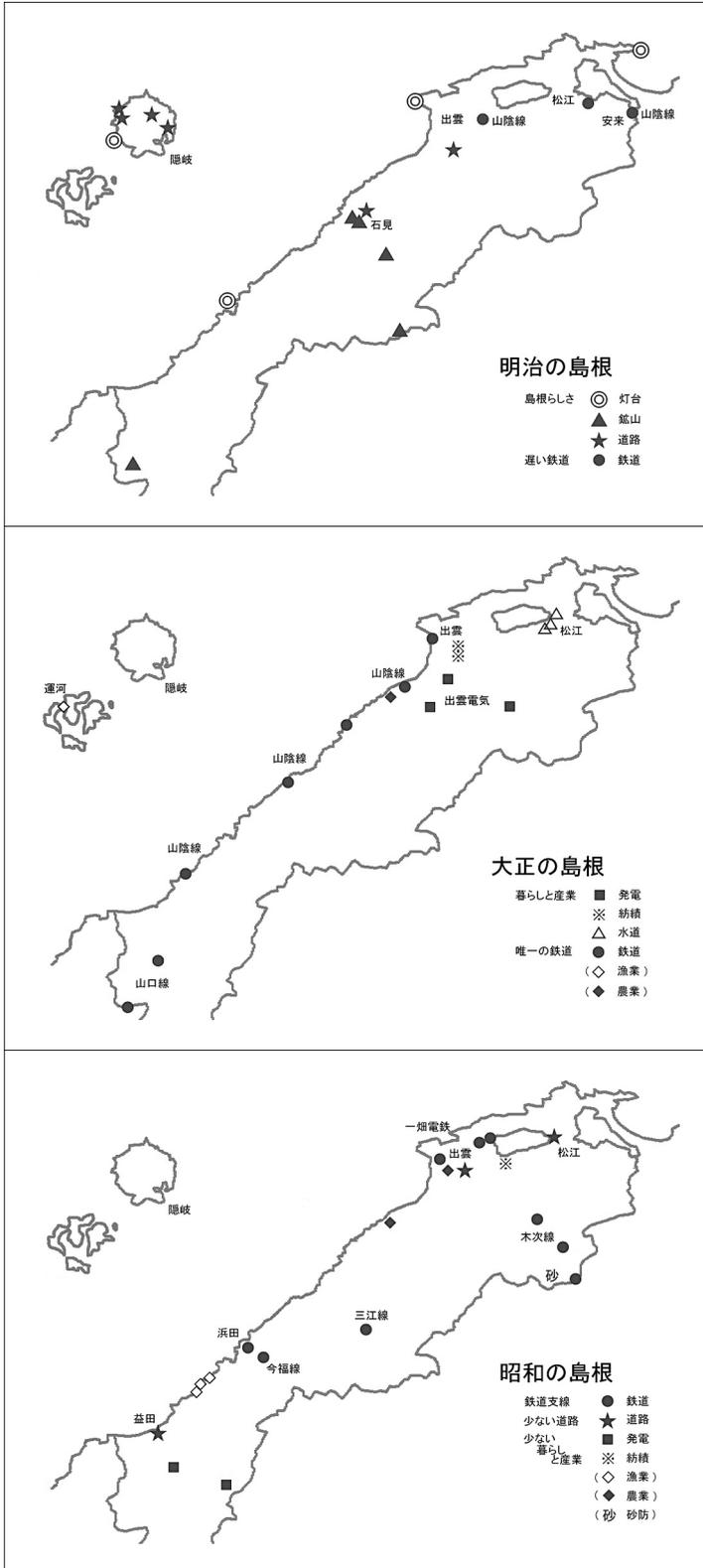
まず、「明治の島根」と題した地図をご覧ください。これは、県内の近代土木遺産の中で、竣工

が明治期で、かつ、「土木遺産」と呼ぶに相応しい構造物を地図上にプロットしたものである。構造物の種類は、灯台、鉱山、道路（隠岐のみ）、鉄道（出雲以東のみ）の4種類しかない。「遺産」に相応しくないものまで入れれば、もっと他の種類の構造物も出てくるのであろうが、県全体の大まかな傾向を感じ取るにはこれで十分だと思われる。なぜなら、その県にとって真に重要なものなら、①かなりの数が造られていたか、②桁外れに立派なものが造られていたかのどちらかであり、①なら今でもかなりの数が現存しているはずであり、②なら容易に取り壊されるようなことはないはずだからである。今日ほしい物が何も残ってないということは、恐らく、初めから何もなかったのであろう。大胆な推論だが、誤差はそれほど大きくない。ただし、調査がしっかりしていることが前提となる。島根県の近代化遺産調査は、県をあげての調査なので、悉皆性は保障されていると考えたい。そうすれば、明治期の島根の国づくりは、灯台、鉱山、道路、鉄道の4つによって代表されていた、とみなしても大きな間違いはなかろう。

まず、灯台と鉱山であるが、これらは本当の意味で「島根らしい」土木遺産だと思う。わが国は四周を海で囲まれているので、ほとんどの県は海に面しているが、灯台が県の特徴になっているケースはそれほど多くない（静岡、兵庫、山口、愛媛、長崎が主な例）。一方、鉱山については、近世以来わが国有数の鉱山であった石見銀山の存在が大きく影響している。ちなみに、鉱山が特徴になっている県は、秋田（尾去沢、小坂）、新潟（相川）、栃木（足尾）、愛媛（別子）くらいしかない。

次に、道路関連の遺産は、一般に、橋とトンネルで99%が占められる。島根の場合は、道路といっても、隠岐のトンネル群がその主体である。明治期は全国的に道路が冷淡視されていた時代で（資金的余裕が乏しかったため）、現存する遺産級の道路橋の多くは東京、大阪、開港場に限られていた。地方の橋は、九州地区を除いて100%近く木橋であり（ほとんど朽ちて永久橋に架け替えられてしまった）、現存しているものは稀である。一方、現存する遺産

4 島根県の近代土木

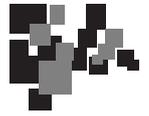


級の道路トンネルの多くは、幹線街道のシンボリックな存在であったものが大半である（明治期は滅多に道路トンネルが掘られなかった）。そういう意味では、隠岐に明治期の道路トンネルが多数残っているということは、実に特異な事象であり、島全体が近代化しようとしていたことの証だったと解釈することができる。逆に言うならば、隠岐を除く県内各地では、陸上交通が重きを置かれていなかったことを示唆している（橋は造られたかもしれぬが木橋にすぎず、トンネルは造られなかった、つまり、山間部には荷馬車が通れるような道は存在しなかった、と解釈できる）。

最後の項目は鉄道構造物であり、「山陰線」の関連施設がそれであった。しかし、明治時代に鉄道が布設されたのは県東端の出雲までであり、それもようやく40年代になってからのことであった。わが国の幹線鉄道は、東海道、東北、山陽、関西、鹿児島各線（いずれも現在の路線名）は明治20～30年代にかけてほぼ完成している。そういう観点からすれば、明治41年に松江、明治45年に大社、…大正10年に浜田、というテンポは如何にも遅く、島根県が近代化に乗り遅れた最大の要因だと思われる（鉄道構造物の登場が島根より遅い県は、宮崎と高知の2つしかない）。ただ、鉄道の到来が遅れたからといっても、それは多分に地理的要因によるものであるから（日本全体の枠組の中で決まった話で、地元の責任とは言えない）、大正以降に遅れを取り戻すこともできたはずである。実際、大正期の島根を眺めれば、近代化に乗り遅れまいとする意気込みがうかがえる。

大正期

「大正の島根」と記された地図には、発電、紡績（土木遺産ではないが、参考のために示した）、水道、鉄道、漁業、農業の6種類の施設をあげておいた。明治期の4項目から2つ増えているが、数もさることながら、中身の変化が重要なのである。



明治期の場合、灯台と鉄道は、島根の自助努力によるというよりは、全国的な沿岸航路整備（灯台の場合）、あるいは、京都から日本海側に鉄道を敷くという大きな流れの一環として（鉄道の場合）、たまたまそこに島根県があったから造られたに過ぎない。島根オリジナルは鉱山と道路の2つのみであった。そして特に、地域開発、地域の近代化という観点に限れば、隠岐の道路トンネルだけが「地元志向」の施設群であった。

これに対し、大正期の6項目の中で、「暮らしと産業」と銘打った3項目（発電、紡績、水道）は、地元の自助努力による、地域の近代化への試金石として位置付けられる。まず発電であるが、図中の3点はいずれも出雲電気の小規模発電所である。出雲電気によって起こされた電力のすべてが産業用だったわけではないが、平野部に紡績などの工場が立地し、近場の山あいには水力発電所を建てるというパターンは、当時全国各地で見られた典型的な近代化のプロセスであった。水道について、県都であった松江市に、大正中期に近代水道が創設された。これは、この規模の都市としては、かなり早い方に属する。ここにも近代化への息吹が感じられる。

次に、4番目の鉄道については、「唯一の鉄道」という銘を付けておいた。鉄道が（内陸部は手付かずのまま）海岸線に沿って西進していったことを強調した積りである。鉄道による近代化は、他の全国の多くの県と同じように、島根の場合も1本の線として伸びていった。それはそれで当たり前のことなのだが、島根より鉄道の導入が早かった日本中のほとんどの都道府県では、この時期、鉄道はすでに面的に広がり始めていた。つまり、全国各地で近代化が面的な広がりをもって伸展していたとき、島根ではまだ海岸部だけが恩恵に預かれたにすぎなかった。

残りの漁業と農業については、1件ずつのエントリーである。内容的にも特例的で、とても県全体の特徴とは言えない。凡例のところ（）を付けたのは、そのためである。

以上をまとめると、大正期の島根は、松江から出雲にかけての県東部で近代化への脱皮を図ろうとする兆しが現れた。これは恐らく、明治末期における

鉄道の開通が引き金となったものであろう。そして、大正期になって鉄道が県を縦貫していったことで、次の時代に向けて全県的に飛躍できるだけの素地は整った。それが遅きに失したものであったのかどうかは、昭和期の近代土木遺産の数と内容と質を見れば類推できる。

昭和期

結論から言えば（残存する土木遺産から類推する限り）、島根の昭和戦前期は、失意と挫折の時期であった。「昭和の島根」と書かれた地図には、これまで一番多い7つの項目が上がっている（どこの県でも、時代が下れば必ず多様化＝項目数の増加＝が起こるものだ）。そこまでは良いのだが、2つ目に上がっている道路のところに来ると、その異様さに驚かされる。図中には、遺産的価値のある道路構造物が3件しか上がっていないのである。図中には全部で21の構造物があるので、その比率は14%になる。しかし、全国平均では道路関連遺産は全体の40%にも達している。つまり、全国的に見れば、昭和戦前期というのは、鉄道がもたらした近代化のプロセスが、網の目のような道路によって県内各地に波及していった時期と位置付けることができる。その他の部門、発電とか農業とか漁業などは県によって得手不得手があるのだが、道路だけは地域の「血管」として一様に重視され整備されていた、というのが大方の状況であった。それが島根では、全国平均の3分の1しか残っていないのだ。

もちろん、島根県でも道路造りに熱を入れていたのかもしれない。それが橋やトンネルの建設と結びついていないだけなのかもしれない。また、遺産となるような立派なものが少なかったのかもしれないし、あるいは、既に潰されてしまったのかもしれない。しかし、それにしても3件という数はあまりに少なすぎる。大河のない県でも、深い谷あいには橋やトンネルは数多く造られている。結果を見る限り、島根県は昭和戦前期に道路を造ってこなかったところ、とみなすことができる。良し悪しは別として、それが島根県の特徴なのだ。そして、日本の近代化が、「メインは鉄道、ローカルは道路」という二段

4 島根県の近代土木

構えで進んでいったことを考えると、島根の近代化は海岸線のところで停止してしまい、内陸部には及んでいかなかったことになる（例外が木次線や三江線の沿線で、この地域では鉄道を通じて近代化が浸透していったのかもしれない）。

順序が逆になったが、凡例の筆頭にあげてある鉄道は、①宍道湖の北岸を經由して2大都市エリアである松江と出雲を結ぶ一畑電鉄の路線、②木次線沿線、③三江線沿線、④浜田から南下する未完の今福線の4ヶ所で遺産を残している。昭和期の鉄道構造物は一般に面白味が減るのだが（遺産的価値のあるものの割合は極端に少なくなる）、それでもこれだけの数が残っている。やはり、事業のあったところには、必ず遺産が残るものなのだ。これら4ヶ所の中で、最初にあげた一畑電鉄だけが、都市近郊路線的な性格と、参拝鉄道的な性格を兼ね備えた「地域性の高い」存在である。近代化の遅れた島根県の中で、松江～出雲地域の先進性を強く主張する存在である。

3番目の発電にも、近代化の遅れの影響が見られる。というのも、新規の発電所は県南に2ヶ所のみで、大正期に比べてペースが落ちている。遺産的価値のないものまでカウントしても、昭和戦前期の発電所は県下で4ヶ所しかない。これは隣県の鳥取の遺産3ヶ所（全体で6ヶ所）と比較しても少ない。地形的な要因もあるのであろうが、昭和期に産業化に乗り遅れたことの顕れと見ることもできる。4番目には参考までに紡績を示したが、これも1件だけと、大正期より半減している。また、大正期にあった水道遺産が姿を消している。昭和期には、全国の中小都市で一斉に創設水道が布設され、それに伴って、「わが町における近代化の証」として装飾的な建屋が数多く造られ、近代土木遺産の大きな担い手となってきた（昭和戦前期の全遺産の9%が水道遺産）。それがこの時期の島根でゼロというのは、とても寂しく、ある意味では象徴的なことである。以上、「暮らしと産業」の項目が、大正期に比べて見劣りしているが、そのことから、松江～出雲地区以外の地域に近代産業の息吹が伝わっていかなかった様子を汲み取ることができる。

最後の3項目、漁業、農業、砂防については、計6件のデータがあがっている。まず、漁業についてであるが、隣の山口県の場合、遺産的価値のある防波堤が8件にも達し、それが県の特徴になっている。漁港がそんなに多いのは、山口県が瀬戸内、下関海峡、日本海の3つの海に面しているからで、日本海しかない島根県の場合3ヶ所でもあれば十分なのかもしれない（ただし、漁港防波堤が島根の特徴だと言えるほど多くはない）。農業についても2件上がっていて、その中には全国的に見ても価値が極めて高い神戸堰も含まれているが、単発的で、県を特徴付けるまでには至らない。砂防も1件だけ上がっているが、それだけのことである。

[2] 島根県の代表的な近代土木遺産

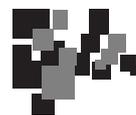
島根県の近代化遺産の調査データ中で、土木関連の施設について、その代表的な構造物の名前を列記したものが表-1である。表の左欄には、島根県の近代化遺産調査における分野の中で、土木に関係の深いものを選択表示し、右欄には、その分野で代表的な（県下で）構造物の名称が示されている。

以下、表-1に準じて、分野と特筆すべき構造物の特徴について概説しよう。

表-1 島根県を特徴付ける近代土木遺産

分野	構造物	
一次産業	農業	神戸堰、掛戸の潮止め水門
	漁業	船引運河
資源	鉱山	清水谷精錬所選鉱場跡
発電	水力	豊川発電所、窪田発電所
交通	道路	松江大橋、高角橋、福浦隧道、大久隧道
	鉄道	島田川暗渠、日向川・志谷川橋梁、大田市駅構内跨線橋、大社駅舎、出雲大社前駅舎
通信	灯台	日御碕灯台、美保関灯台
衛生	水道	千本ダム、忌部浄水場、床几山配水池

農業：[1]で記したように、島根の特徴として農業遺産が多く残っているわけではない。このことは、日本海に面していて大きな平野を持たないという島根の気候・地形を反映したものであろう。確かに、現存する農業土木遺産は数が極端に少なく、内容的にも何か傾向があるわけではない。しかし、その僅



かな数の中に、全国的に見てもトップクラスの土木遺産である神戸堰と、かなり質の高い掛戸の潮止め水門の2件を含んでいることは、島根県の誇りと saying よい。

神戸堰の由来については後出の各論の項に譲るが、この堤高わずか1.8m という小規模な取水堰堤をその他大勢の類似構造物から抜き出して高く評価されているのは、その特異な形態による。開口部幅9mの欠円状の円弧が8個並び（現在は魚道が設置されて6個に減っている）、そこから滝のように水が流れ落ちている様は、類似のものが国内に1件もないという稀少性をさておいても、風景として実に美しく秀逸である。近年、水辺景観の書籍・論文でこの堰が取り上げられることが多い所以である。この堰は、斐伊川放水路事業の中で神戸川の川幅が2倍程度に広げられ、河床勾配も変更されることに伴って撤去される可能性もあったが、河川管理者である国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所のはからいで、現場近くの河川内に再現されることになっている。土木遺産の保存・活用の新しい取り組みの1つとして高く評価したい。

掛戸の潮止め水門は、波根湖干拓に伴って建設された石造の排水（逆流防止）樋門である。この樋門の特徴は2つある。1つは現存するゲート数だけでも8、閉塞された部分まで入れれば12ないし13もあったという点である。国内に現存する多ゲートの石・煉瓦水門は、郡築三番町樋門（熊本、10門、国登録）、立田輪中悪水樋門（愛知、町指定）の2基しかなく、この点だけでも8門という掛戸の潮止め水門の価値は相当なものである。もう1つの特徴はゲートのアーチ開口部が石で構築されているという点にある。先にあげた2樋門でも、また、岡山県に多い「ほとんど石造に見える明治の石樋門」ですら、アーチ部だけは煉瓦で造られていた。掛戸の潮止め水門のように、アーチ部まで石材で造られた樋門はきわめて稀な存在である。

漁業：県内には漁港の石造防波堤が幾つか現存しているけれども、山口県のように地域によって多様に異なる個性のようなものは感じられない。従って、島根の漁業遺産の代表としては、漁港防波堤ではな

く、隠岐に造られた船引運河をあげておきたい。

船引運河は、後出の各論の項によれば、漁業の利便性のために築造されたとある。近代の日本の運河は、①軍事、②沿岸水運のショートカット、③漁業、④産業（臨海工業地帯）などを目的として造られているが、何れも件数がきわめて少なく、③の目的の運河としては他に深谷水道（三重）が知られている程度である（つまり、それだけ価値が高い）。船引運河の完成によって漁場へのアクセス時間がどの程度短縮されたのかは不明だが、深谷水道では2時間短縮されたとあり、わざわざ運河を掘ったくらいであるから、船引運河の場合も同程度の短縮効果があったものと思われる。その後時代を経て、船引運河の用途が観光用、防災用と変化してはあったが、いつも変わらず地域にとって大きな役割を果たしており、土木遺産として存在意義の深い施設である。

鉱山：島根といえば県東部のたたら製鉄と県中部の石見銀山というのが、全国的にも知名度の高い産業であった。しかし、前者は近代に入って廃れてしまった分野なので、近代化遺産に該当するものは、後者の石見銀山関連の施設しかない。それも、観光地として有名な羅漢寺の反橋群をはじめ近世の遺構は多いが、近代に入ってからの大規模施設としては、国の史跡でもある清水谷精錬所選鉱場跡くらいしか残っていない。

全国の選鉱場遺構について網羅的な調査が行われたわけではないが、現存する屈指の選鉱場跡（高低差が清水谷の倍程度はある）と言われる尾去沢鉱山選鉱場（秋田）や紀州鉱山選鉱場（三重）は、何れも昭和戦前期の施設である。清水谷選鉱場のように明治中期に造られた施設は稀な存在である。ただ、遺産として見た場合、多段の石垣があるだけで、昭和期の選鉱場跡のように鉄筋コンクリートの梁や柱が林立しているわけではないから、印象に乏しいことは否めない。

水力：島根県の水力発電の特徴（戦前）は、水路式の小規模発電所が少数見られるということである。現存する発電所建屋の中で1番古いものは大正4年の築造である（そんなに古いものとは言えない）。これが窪田発電所で、木造建屋であるが壁面

4 島根県の近代土木

にモルタルが塗布されている。敢えてもう1つ代表をあげるならば、豊川発電所といえようか（恐らく鉄筋コンクリート造の建屋）。

窪田発電所のような木モルタル造の発電所で遺産的価値のあるものは全国でもそれほど多くない。木造建屋の外壁には一般に下見板張りが採用されていて、それがまた魅力にもなっているのだが、外壁にモルタルが塗布されていると一見コンクリート構造のようにも見え、魅力が半減してしまう。ちなみに、木造建屋自体は明治期から大正期にかけての小規模発電所に典型的なスタイルであった。そして、木造発電所の価値は、明治期のものなら、絶対数が少ないため、現存しているというだけで高く評価されるのだが、大正期のものは現存数が多く、何らかの装飾が施されていないと評価の対象とはなりにくいとされている。その点、窪田発電所の妻部には大きな飾りアーチや旭日風の模様が付いており、全国的にもこの種の装飾は珍しいことから、それなりに評価できる。

豊川発電所は、2階部の浅いアーチ風の窓枠、軒下部のデンティルなどに昭和初期らしい装飾性が感じられる。この種のもの全国的にそう珍しいわけではないが、豊川発電所では一定の水準を超えてほどよくまとまっている。ただ惜しむらくは、今回の調査によっても建屋の構造形式が確定されなかった点で、鉄筋コンクリート造なのか、大正末期～昭和初期に時折見られたコンクリートブロック、鉄骨などが混在した構造なのかは不明として残された。

道路：島根県の特徴（負の特徴）は道路遺産が少ないことであった。ただ、その少ない中で、隠岐には明治期にユニークな道路トンネル群が造られた。このことは、全国的レベルでも特筆に足る。

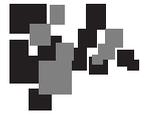
まず、トンネル群の中で最も古い福浦隧道（初代）であるが、小断面の素掘りトンネルながら、明治初年の築造というのはきわめて早い時期にあたる（竣工年は推定）。わが国に現存する明治初頭の道路トンネルがきわめて少ないという現状を踏まえると、それが当時を彷彿とさせる形で残っていることは、それだけで価値のあることと言えよう。初代トンネルのそばには明治31年に完成した2代目のトンネル

も現存していて、海岸沿いの絶壁を通る交通の歴史の生き証人となっている点も素晴らしい。また、2代目の福浦隧道は掘削断面が台形をしているが、同じ島内の大久隧道は尖頭アーチ形をしており、ともに全国でも隠岐にしかないユニークな形態であることも魅力となっている。

道路橋は他県と比べてきわめて数が少ないが、少ないなりに敢えて代表をあげるとすれば、松江大橋と高角橋とでもなろう。松江大橋は確かに著名な橋で、地方のニュースが今ほど伝わらなかった建設当初から、全国的に知られた存在であった。しかしそれは、技術的なアドバンスがあったからではなく、各論の項で記されているように「神国出雲にふさわしい純日本式」の大型橋だったことによる。もし松江大橋が当初の案通りに「機能性を重視した洋式橋」であったらこれほど注目されなかったことは確かである。

高角橋はいわゆる鉄筋コンクリート・ローゼ桁と呼ばれる形式の橋で、戦前のこのタイプの橋は8橋が現存し、そのうち高角橋は最晩期に属する。もともとローゼ桁は、戦時中で鋼材の入手が困難となり、かつ、低平地で下路橋しか造れないような地形の場合、1つの有力な選択肢であった。高角橋はアーチ形の桁が5つ並んでいるが、これは岡山の大原橋の9連に次いで長い（連数の多さも価値の1つ）。

鉄道：島根県下の鉄道が一番古いものでも明治40年頃までしか遡らないということは、そこで見られる構造物の範囲を狭めている。例えば、明治20年代が主流のイギリス型トラスや、30年代が主流のアメリカ型トラスが存在することは望めないし、明治期の小規模橋梁の代名詞であった煉瓦製の拱渠も全盛期はとくに過ぎていた。トンネルについては、大正期までは煉瓦トンネルの時代が続くが、坑口を煉瓦の組積みで飾る時代は遠く過ぎ去っていた（鉄道トンネルの魅力の1つは坑口デザインにある）。逆に、唯一プラスの側面として、昭和期に入ると、鉄道橋に鉄筋コンクリートが導入され、道路橋とは違った形態の構造物群を生み出されていった。従って、島根県の鉄道構造物は鉄筋コンクリートが見どころとなる。



島根県で土木遺産と呼ぶにふさわしい構造物は、島田川暗渠、日向川・志谷川橋梁、大田市駅構内跨線橋であろう。島田川暗渠は鉄道用として初めて鉄筋コンクリートを試行的に用いた構造物で、本報告書の各論の項で初めて完成年が明治39-40年と明確に結論付けられた。従来は明治37年とされていたもので、時代が2年以上新しくなったことは残念であるが（道路用に初登場した明治36年よりかなり遅れをとったことになる）、島田川暗渠が鉄道用として日本初の構造物であることに変わりはない。

もう一つ、技術的に重要なものではないが、全国でここにしか見られない変り種として、日向川・志谷川橋梁をあげておこう。背の高い橋脚の途中に2ヶ所、飛梁が挿入されていて、横から見ると「目」の字形になるというものである（珍しさも、価値判断の一材料となる）。

大田市駅構内跨線橋は、後出の各論で明治23年の製造であると記されている（新発見）。そして、現存最古の跨線橋である可能性が指摘されている。跨線橋については悉皆調査された前例がないため明確な結論は下しえないが、いずれにせよ、山陰地方に鉄道が進出してくる20年も前の構造物であり、移築再利用された貴重な遺構であることは確かである。今後、安全性を保障するような形で修復した上で、未永く使われることを期待したい。

土木遺産の定義からは若干外れるが、鉄道関連施設ということで駅舎をここに含めれば、島根県には、大社駅舎と出雲大社前駅舎という優れた歴史的構造物が残っている。同じ出雲大社を意識しながら、一方は本格的な仏閣風駅舎、もう一方はアール・デコを思わせる派手な洋風駅舎と対極にあるところが面白い。前者は県指定、後者は国登録でもある。

灯台：島根県には、日御碕灯台と美保関灯台の2つの灯台がある。前者は世界灯台百選にも選ばれているくらいの著名な灯台で、高さ43.6mは日本一である。円形断面をした石造灯台だが、石肌を露出させたダイナミックなスタイルが特徴である（白漆喰が塗布されている場合も結構多いが、そうすると鉄筋コンクリートと見分けがつかない）。一方の美保関灯台も世界灯台百選に選ばれている（国内の近

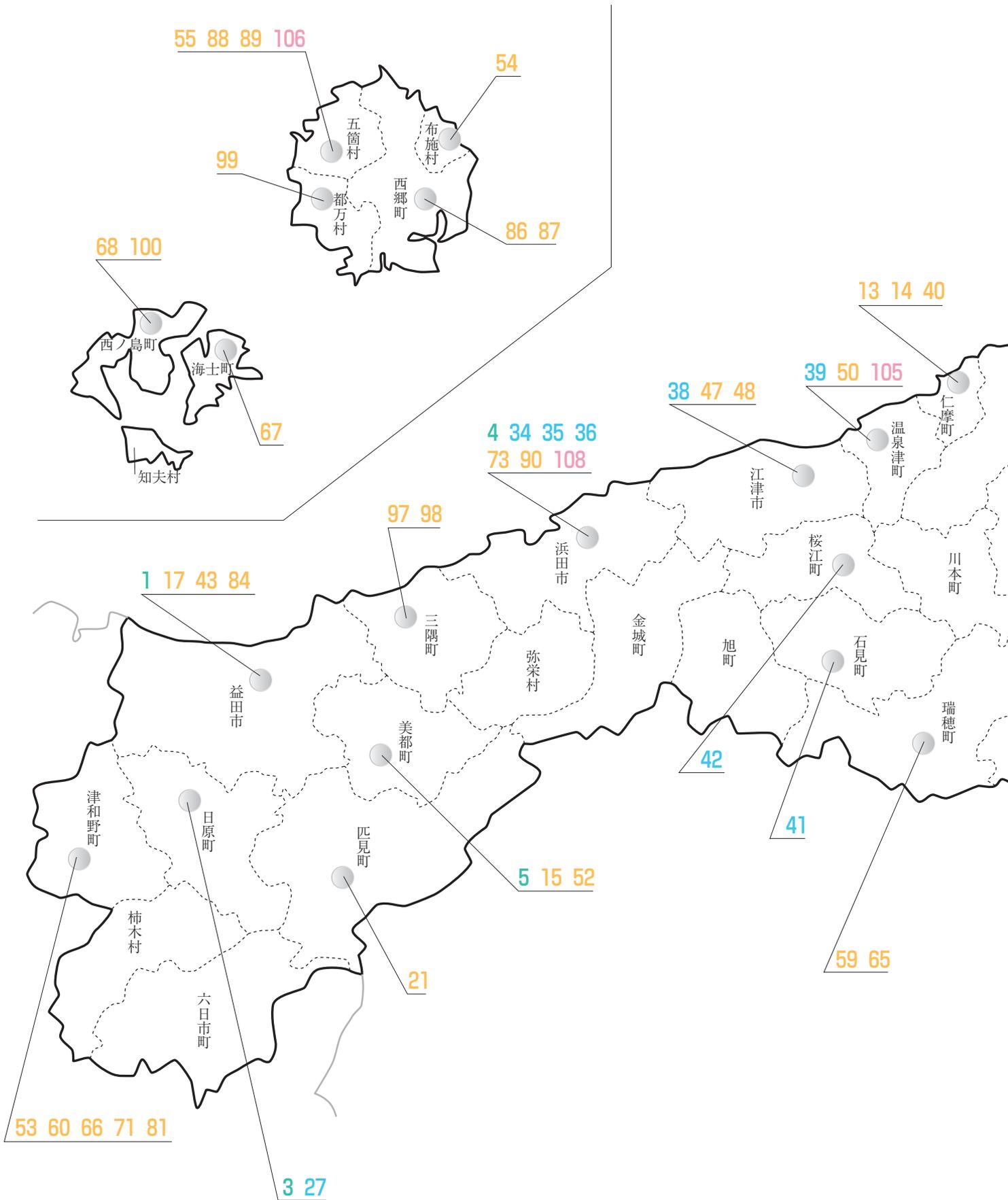
代灯台で百選に選ばれているのは他に姫埼、犬吠埼、神子元島の3灯台であり、島根に2つも該当するものがあるのは名誉なことである）。美保関灯台が百選に選ばれたことには若干疑問がないわけではないが（小型で定型的なデザインの割りに設置年代が明治30年代と遅い）、ビュッフェとして活用されている（元）吏員退息所の華麗な装飾も何割か効いているのであろう。

水道：松江市の水道施設は、市の人口規模からしてあまり大規模なものではないが、装飾に対するこだわり、保存状態の良さの2点で、全国の地方都市の水道遺産の中でも高いレベルに位置する。

水源である千本ダムは、大正中期という建設年代と規模（堤高、堤長）との関連で言えば技術的に先進性があるとは言えないが（山陰地方で初めての水道用ダムという点だけ）、①溢流部と非溢流部のレイアウト、②堰堤上の手すり構造、③ダム直下の弁室の丸みを帯びたデザイン、④ダム下流部に作られた桜公園（かなり荒廃しているが）、の4点に独自性がある。特に、③の弁室の異様とも言える「丸さ」は、床几山配水池の計量室にも相通じるもので、全国でも松江市だけと言っていいユニークさである。水道施設とともに桜公園（④）が整備されたのは、一種の景観への配慮であり、戦前の土木施設では時折見られることで、それはそれで良いのだが、手入れが悪すぎる。

忌部浄水場の緩速ろ過池周りには多くの小上屋が建てられていて、その何れも、かなり過剰に装飾されているが、それほどの独自性・質の高さは感じられない。むしろ、前述した床几山配水池の計量室の丸みを強調した特異なデザインに魅かれる。細かく見れば、建物の四隅にエンタシスを強調した円柱を挿入し、その柱の頂部には丸っぽい柱頭が付き、さらに、軒の端部にもはっきりとわかる丸みが付けられている。良し悪しは別として強烈な個性が感じられる。

（馬場俊介）



JA 西いわみ鎌手支所 (旧鎌手村産業組合)

農業／益田市西平原町553／JA 西いわみ／昭和10年(1935)

所有者 JA 西いわみ農業協同組合
構造 木造2階建て、石州瓦葺き切り妻造り

JA 西いわみ農業組合鎌手支所は JR 鎌手駅の西方、歩いて数分の距離で国道9号線に面して建っている。

昭和10年(1935年)に工場として建築され、後に、旧鎌手村産業組合の本所となり組合事務所および集会所として使われていた。

建物の平面形状はT型で2階建ての部分と平屋建ての部分からなり、ファサードに施された意匠の様子から平屋建て部分が事務所で2階建ての部分が工場であったと思われる。

外観は随所に気配りのデザインが施された洋風で、尖塔状の棟飾りと勾配が付いた破風をもつ急勾配の屋根や石貼りで重厚な雰囲気玄関ポーチがこの建物の高い品格を創っている。

屋根はこの地方の特産である石州赤瓦葺きの切り妻造りであるが、樋を隠した軒先や瓦を一行とりやめたケラバの意匠によって和瓦葺き屋根の重々しさがなく軽快な感じを受ける。

外壁は腰壁が石貼り、中間部が板張りのペンキ塗り、上部は漆喰塗り、窓は欄間付きの縦長形状で建築当時は洒落た洋風建築として話題になったことであろう。

窓の一部がアルミサッシに改修されるなどしているが、建築当時の面影をよく伝える保存状態の良い

建物である。 (勝部 昭、平野久雄)

〈参考文献〉

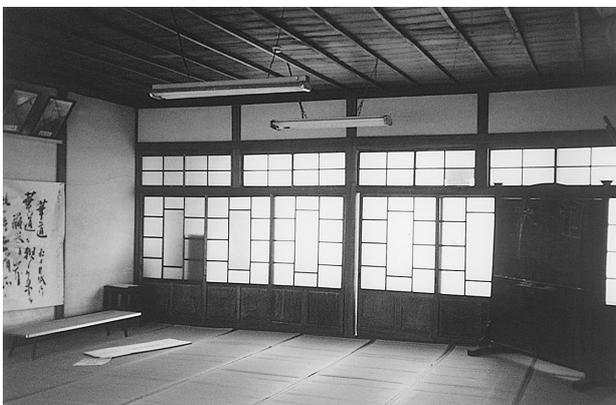
(1) 山陰中央新報「島根洋館紀行7」



ファサード 左が2階建て部分



尖塔状の棟飾りと石貼りの玄関ポーチ



2階建物の内部



2階建て部分の全景

所在地 大田市波根町上河内418番地
 管理者 波根土地改良組合(山田 昇)

国道9号線を出雲と石見の境、仙山峠を下ると、波根の平野が眼下にひろがる。

この平野を東西に流れる波根川の形成した沖積地を中心に、明治の初期にすでに約100ha近くの水田が開かれ、その灌漑用水の多くは、小規模なため池や波根川の流水に依存していた。しかし流路延長わずか4.5kmの波根川は、旱魃の年には水不足を生じ、安定した水の確保は大きな課題であった。

昭和に入り、この地域でもコンクリート施工の近代的なダムや堰の築造が行われるようになった。昭和4年(1929)に波根川の上流、谷の入り口(波根町上河内402)に完成した谷山池(堰高約8m、堰長27m、総貯水量25,200m³)はコンクリートを使用した煉石積みの近代的ダムである。

骨材はすべて現場で採取したもので、砂は河床土を石ゾウケ(目粗に編んだ竹製のザル)で水洗いをして採取し、粗骨材は付近で採取した玉石、あるいは堅い山石を集積して人力で破碎し、水洗いをして確保した。コンクリートの練り合わせも、練り板と小型の角スコップを使った手練りである。

その後、この谷山池は、堰堤をかさ上げして貯水量の増大が図られたが、下流の約40haの水田を潤すには十分でなかった。

昭和14年(1939)、県下全域が未曾有の大旱魃に見

舞われた。このため、谷山池から約500m上流に深山池の新設が企画され、昭和15年(1940)着工、昭和18年(1943)に完成した。

深山池は、堰高15m、堰長24.5m、総貯水量80,000m³の灌漑用ため池である。堰堤は「煉石積み玉石中詰め重力式ダム」で、優れた日本の石組技術を駆使して築造された。

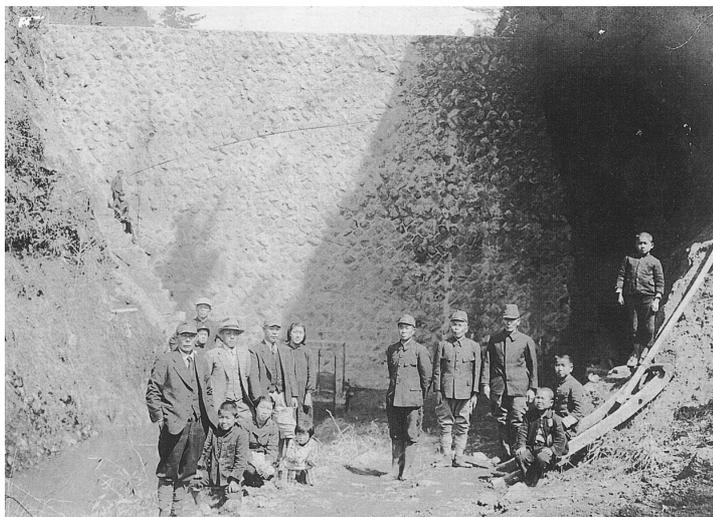
堰堤は強固な火山礫凝灰岩の基盤を床掘りし、外面を煉石積みで積み上げて堰型をつくり、中へ玉石を詰め込んで仕上げたものである。

工事の状況は、10年前の谷山池とほぼ変わらず、骨材、石材は現地で採取し、すべて人力によって施工されたが、ちょうど戦争のさなかで労力の調達が困難であり、「食料増産」大義のもとに学徒動員により、50kgの袋詰めのセメントを2分して、背負って現場まで搬送したという。

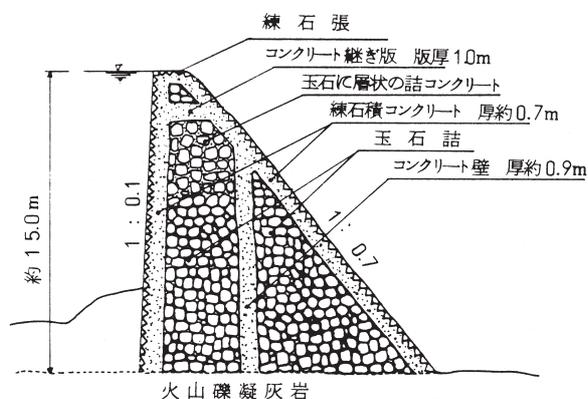
昭和57年(1982)、コンクリートの老朽化に伴う漏水のため、グラウトモルタルを注入して補強し、同時に堰堤上にコンクリート製の橋梁も取り付けられた。(勝部昌正)

〈参考文献〉

- 『島根県土地改良史』
島根県土地改良史編さん委員会
島根県農業土木技術研究会編 1982年
- 角川日本地名大辞典編纂委員会
『角川日本地名大辞典・島根県』1979年
- 『大田市三十年誌』1983年



完成当時の深山池堰堤(山田 昇氏提供)



深山ダム構造推定図(「島根県土地改良史」より)

所有者 藤井悦子
 設計 不詳
 施工 不詳

津和野藩では高津（益田市）に蠟座をおいて盛んに製蠟をおこない、これを専売にして輸出し藩財政の重要財源とした。このため大いに櫛の実の増産を奨励し、村々に割付けて強制的に納めさせ、余りは自由に取引させた。

天領日原には早くから蠟板場があつて盛んに製蠟をおこない、沖船によって大坂北浜から新潟方面へ輸出した。

明治4年(1871)11月櫛の他売勝手こと、の触れが出され、自由に誰でも蠟板場が経営できるようになった。その頃、青原に共同出資で青原蠟板場を設置した。左鐙にも八幡宮の沖に蠟板場ができた。

しかし一番多いのは日原で、翹屋・えべす屋・大和屋・鹿島屋・林屋・亀屋・平野屋・長門屋などがやっていた。

蠟板場は板場と粉部屋にわかれ、粉部屋では買い集めた櫛の実を叩いて実と茎を分離し、大きな石臼で挽いて粉にし、これを板場へ送る。板場では粉を蒸して蠟を絞る。絞り方は漸次改善されたが末期の絞り方は、粉を袋に入れて部厚い板に挟み、撞木に似た釣木で左右から楔を打ちこんで、絞り出した汁を鉢さいに受けて固まらせるのであった。そのままのものを晒蠟、二回目を絞ったのを二番蠟といった。用途は蠟燭や鬢つけ油の原料であった。

いずれにしても家内工業としておこなわれたが、釣木で楔を打ちこむカチンカチンという音が日原の町筋では早朝から方々で聞こえ、随分喧騒であったことと想像されるが、古老に聞くとこの音がないと

却って淋しく落ちつかない位であったという。

蠟板場は4人掛りの一面木をもっているのは一日60貫を搾め、二人掛りの半面木をもっているものは一日30貫搾めるのを普通とした。生蠟は百斤が12.3円（当時の日傭賃一日14銭位）であった。

翹屋と長門屋では蠟燭をつくっていた。部厚い鉄鍋に蠟をとろ火で溶かし、芯をこれへつけてあげると蠟はすぐ固まる。これを繰り返して丁度適当な大きさになると包丁をぬくめて切って仕上げる。芯は、ゆ（細蘭）の芯を針で抜き出して、乾かし、小さな竹の棒に2、3本くるくると巻きつけてつくるのであった。

木造 二階建 瓦葺（3部屋・板張）
 （平面・18.64×4メートル）

（村上 進）

〈参考文献〉

- (1) 大庭良美『日原町史近代上巻』1976年
- (2) 大庭良美『石見日原村聞書』株式会社未来社 1974年



翹屋蠟板場

4

折居漁港東防波堤及び西防波堤

漁業／浜田市西村町折居／東：昭和2年(1927) 西：昭和7年(1932)

那賀郡三隅町に接し、浜田市内南西端の西村町折居に所在する。標高599mの大麻山を南東に見上げ、折居海岸のほぼ中央で突出している。北西沖約400mには、大麻比古命が投げた鞍だとされる鞍島がある。海岸は、岩場の上に砂が堆積したものである。

東防波堤は、昭和2年(1927)金毘羅宮とお招の松のある岩を起点として築造された。1個の表面長0.6～1.3mのやや丸味のある石を波上高約0.5m・幅2m・長さ約20m、北西湾曲するように積み上げた。その後、岩までの砂地にコンクリート造りの橋が架けられ、先の当初の捨て石のように同じくコンクリート造りでL字状に波上高1.2mまでに築造した。

西防波堤は、昭和6年(1931)に調査統計がされ、翌年地元負担3000円で完成した。東防波堤の西約50

m西、砂地の岩礁を起点として、1個の表面長1.0～2.0mのやや丸味のある石を波上高2.0m・幅4.0m、長さ82.0m、北東に湾曲するように積み上げた。その後、先端にある岩までの約10mをコンクリート塊を波上に積み上げている。

いずれも那賀郡大麻村時代のもので当時の繁栄を知ることができる。昭和28年(1953)3月、津摩漁業組合に合併された。その後、組合員の高齢化と後継者不足等からここを基地として漁業を営むものはほとんどいない。

現在、浜田市が管理している。 (宮本徳昭)

〈参考文献〉

- (1) 『浜田市誌上巻』1973年
- (2) 『漁港台帳』



折居漁港東防波堤



折居漁港西防波堤

5

笹利山根家長屋門

養蚕／美濃郡美都町／江戸末期

はたさ はちろう

秦佐八郎博士生家 笹利長屋門

美濃郡美都町大字都茂807番地

所在地 美濃郡美都町都茂上
 所有者 山根千鶴子
 竣工年
 設計
 施行
 構造・形式 木造一部2階建て 妻切屋根 赤瓦葺

はたすけはちろう

秦佐八郎は、1873(明治6)年山根道恭・ヒデの8男として旧都茂村に生まれた。15歳のとき同村医家秦徳太・ツタの養子となり、岡山第三高等学校医学部卒業後、北里柴三郎博士のもとでペストの研究に従事、その後ドイツにおいてパウル・エールリッヒ博士と共に1910(明治43)年、当時亡国病と呼ばれていた梅毒の特効薬である化学療法剤サルバルサン606号(砒素化合物)発見という偉業を達成した。

帰国後は国産製造化と適正使用法の普及に務め、1912(明治45)年には医学博士の学位を受けた。晩年は慶応大学医学部教授、北里研究所副所長等を歴任し、1938(昭和13)年66歳で死去している。

山根「笹利」家は、都茂と丸茂の境に位置する。江戸時代終りには庄屋職を務めるほか、佐八郎の父は明治初期の都茂村戸長となり、造り酒屋、醤油製造の他に、1889(明治22)からは近隣で盛んとなった

養蚕業の普及に努めた。長屋門は蚕室としても積極的に活用されてきた。

生家に残っている万延元(1860)年11月下旬に作成された家相図(108×165cm)によると母屋、長屋門、酒造蔵等の建物が表示してある。建物は西北西の都茂側を向く。現在は氷室がなくなる外、酒造蔵の跡には「秦記念館」が1994(平成6)年建設されている。

長屋門は、門をはさんで両側に長屋をもつ形式で、笹利では高さ1間の石垣の上に幅14間の建物が築かれ、右(南)側には納屋と物置、左側には物置がある。この内左側の物置(2間×4間、床モルタル)は1983(昭和58)年に建替えされたもので、外観は他と統一してある。家相図によると当初は物請置場、漬物置場、土蔵が続いていたようである。右側は、現在棟を1段低くしながら牛舎と物置2部屋(床張)が増築(3間半×7間)されている。屋根は萱葺きから瓦葺きになり、2階部分にあった越屋根も今はない。

当時のままの長屋門は3間×10間、松材を中心に一部栗材も使用されている。通りに面した西側の外壁は板張(ささら子下見張)、母屋側は腰高までは板張(同)、漆喰壁となっている。

門は奥行3間、幅2間、両側石垣の上は腰板(同)に漆喰壁で扉はない。現在は10段の石段(モルタル仕上)と一部段差無しのモルタル仕上である(元は3段の石段)。

納屋部分は2部屋(3間×5間半)あり、母屋側



笹利長屋門



笹利長屋門

から見て左の間に木製片引硝子戸の入口がある（現在使用していない上部縦格子2間幅の片引木製戸もあり）。土間はモルタル床、元々6畳あったものと思われる。2本溝敷居の左側は6畳間、右は板張床の6畳で階段がある。共に西側開口部は木製窓枠引違硝子戸、棹縁天井で2本溝敷居でつながる（建具無、近年改造あり）。右側の間は左の間より床が8寸高く、入口右横の木製片引戸からと窓側の片開戸でつながる。12.5畳の板張床、板壁で踏天井、中央には囲炉裏がある。2本溝敷居の外の西側に半間幅の縁がある。東西の開口部は2本溝敷居の木製引違硝子戸、母屋東側には外側に雨戸がつく。

2階（3間×4間半）には木製直階段を上る。右側の木製片開戸を開けると廊下になり、通りに面した廊下の足元には高さ8寸の引違戸（吐出）その上に中連の2本溝（障子戸）、外側に雨戸がつく。続きの畳間で入口側は3本溝敷居で12畳半、荒壁で棹縁天井、次の間（門の上）は2本溝敷居で10畳、押入はない。母屋側には手すりの出窓がある。

物置は片引戸で15畳の土間、荒壁で上部に縦格子の明かり窓がつく。醤油製造の道具が残っている。

長屋門と母屋は村役人の建物形式として、また医学者秦佐八郎博士の生家として貴重と考える。

（河野敏弘）

鉱業／大田市大森町／同和鉱業(株)／明治28年(1895)

所有者 同和鉱業(株) (藤田組)
 設計 武田恭作 (東大冶金学科卒藤田組社員)
 構造 収銀湿式製錬所 (詳細不明)

江戸時代を通じて幕領として銀山の生産が続いた石見銀山は江戸幕府の崩壊と共に幕府の手を離れたが旧来の自分山と呼ばれる坑道と小規模な製錬施設は地元の手によって継続された。

大規模な鉱山経営が再開されたのは萩出身の藤田伝三郎らが起こした藤田組 (大阪；現同和鉱業株式会社) が明治19年(1886)に佐比売山神社周辺の借区権 (採掘権) を確保し、翌年に仙ノ山一帯の採掘権を確保した時からである。

仙ノ山福石床の銀含有率・量が試験で良いことに着目して当時唯一といってよい東京 (帝国) 大学冶金学科卒の武田恭作^(注)設計による新型製錬所が清水谷に当時20万円の巨費を投じて起工、明治28年(1895)完成、操業を開始した。「収銀湿式製錬」式といわれるが構造、仕組みとも詳細は不明である。

だが福石鉱床から産出する鉱石の品位(質)が思っ

たより良くないことに加え、銀製錬能力が設計時の予想より低かったことから不採算となり、1年半の操業で製錬所は休止した。その後、仁摩町柑子(こうじ)谷の永久製錬所に製錬機能は移転した。

製錬所の基礎(石垣など)や清水谷の蔵之丞間歩から続く選鉱施設、鉱石運搬ルートのトロッコ道など全てが遺跡となって今日に伝わる。

清水谷製錬所の規模、構造については同和鉱業、東大冶金学科の何れにも資料が伝わっておらず、全容は不明であるが当時の古写真のみが現存する。

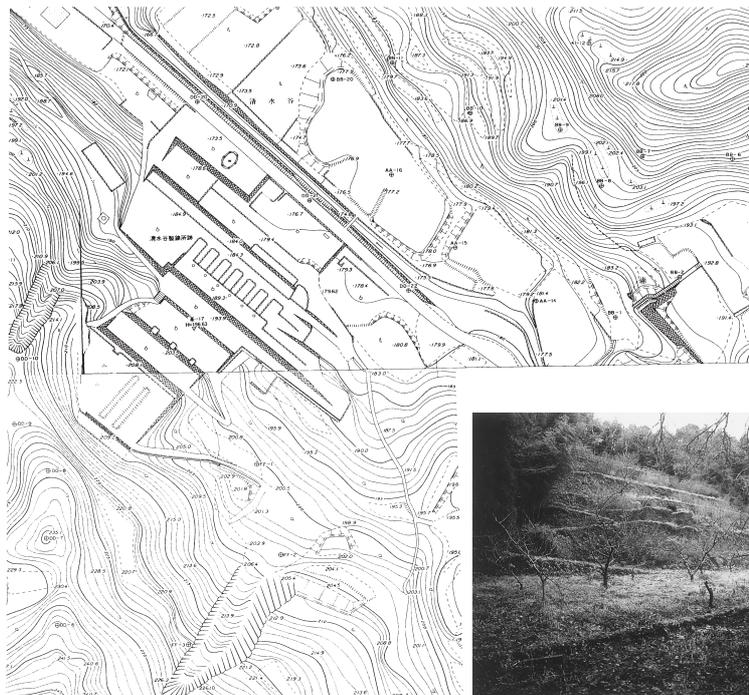
仙ノ山の北西側中腹にある蔵之丞間歩は山腹を貫いて約800メートルで山の裏側にある下金生坑と繋がっており、そこから縦坑でさらに大久保間歩など福石鉱床の中央部に連結されている。この蔵之丞・下金生ルートは江戸時代以前に開坑していたとも推定されるが現状では明治時代以降に整備拡張されており、この清水谷製錬所に関連して整備されたことも想定される。

(大国晴雄)

〈参考文献〉

『石見銀山遺跡総合調査報告書—第一冊遺跡の概要—』
 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1997年

(注) 武田恭作 明治26年11月藤田組入社。大森鉱山に赴任し、明治30年に秋田小坂鉱山に転勤し技士長兼精鉱課長となる。明治37年に所長となり、明治38年退職し、東北の鉱山を経営した。(『創業百年史』同和鉱業株式会社、1985年)



大森鉱山清水谷製錬所跡現況図 (1/1,500)



大森鉱山清水谷製錬所跡 (現況)



大森鉱山清水谷製錬所跡 (当時)

7 大森鉱山トロッコ道

鉱業 / 大田市大森町 / 明治28年(1895)

清水谷製錬所の建設と同時に、この製錬所鉱石を運び込むためのトロッコ道が建設された。今日では竹や雑木が繁茂しているが、軌道跡は、谷の急斜面に造られた幅1~1.5m前後の平坦面で、製錬所の最上段東側から南方面に約300mにわたって、標高210m前後の等高線にそって比較的よく残っている。地形によっては、路肩の崩壊を防ぐために谷側を石垣で補強している。

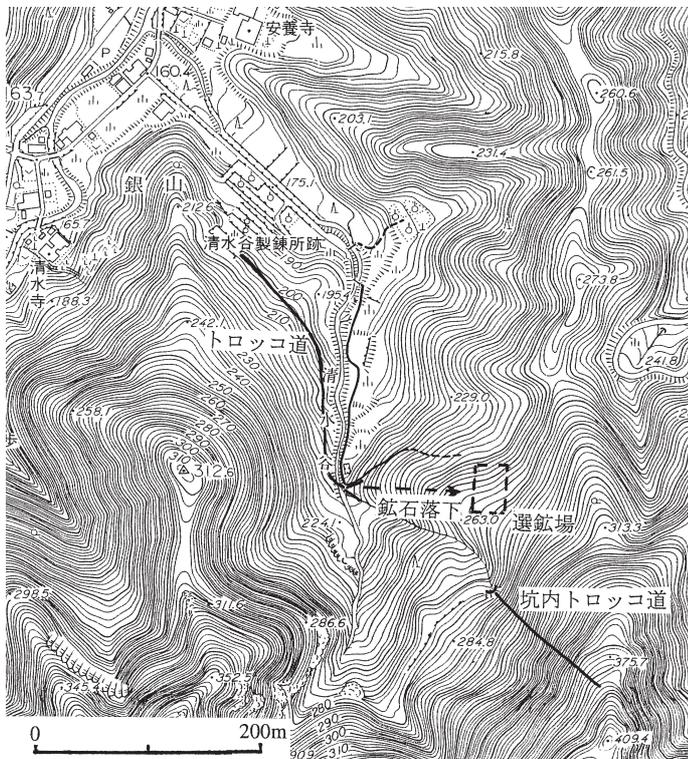
このトロッコ道は、製錬所の南側の清水谷間歩(坑道)群や、さらにトンネルを通過して仙ノ山の南東斜面にあたる本谷間歩(坑道)群などからの鉱石の運搬を予定していたものと思われるが、短期間で製錬所が操業を中止したため、実際にはあまり使われることもなかったといわれる。

このトロッコ道に関しては東京大学工学部冶金学科図書室蔵の明治28年7月に佐伯芳馬がかいた「大森銀鉱山レポート」(原文は英文)に詳細が載り、トロッコ道などのようすを知ることが出来る。

(勝部昌正)

<参考文献>

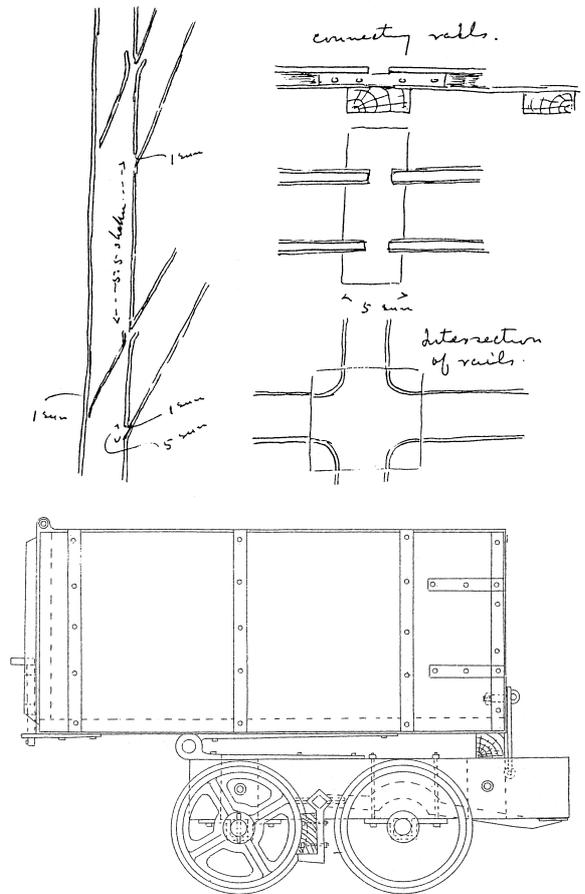
- (1) 大國晴雄『石見銀山歴史散歩』1992年



大森鉱山トロッコ道の位置図

Rails into the Mine.

In most important levels the rails are laged on the lengths of single line reaches to 1,043 shaku and that of double line reaches to 505.7 shaku. These gauges of rail is 1.7 shaku and sleepers are laged at every 2 shaku. The weight of rail is 9 pounds per yard and its cost is 3 cents per shaku. The sleeper of rails is mostly chest nut tree wood and it endures only one to one and one-half years. The branching of rail is made as shown with sketches



佐伯芳馬「Report of Ohmori Silver Mine」による(東京大学工学部マテリアル学科図書室蔵)

所有者 同和鉱業株式会社

事業の概要・沿革

大森鉱山は大田市中心部から北西約10kmの大森町及び隣の遡摩郡仁摩町大国柑子谷に所在する。この鉱山は近世においては石見銀山と称された日本有数の大銀山であるが、藤田組による経営の下では銅山として開発される。

合名会社藤田組（現同和鉱業株式会社）による大森鉱山の経営は、明治20年(1887)から始まる。明治19年(1886)9月地元の田中義太郎、小川兵市両氏が借区する一鉱区の借区権（3372坪）を買収したのをはじめに、翌年3月にはさらに93854坪2合の借区権を買収し、この鉱山での本格的な操業を開始する。

大森鉱山は大森町側の銀山部と仁摩町大国側の永久部とに区別された。開発当初にあつては銀山部側に鉱山事務所や生産関係の諸施設が置かれたが、明治29年(1896)以降それらの諸施設はすべて永久部側へと移された。明治32年(1899)竹田吾作によって内中瀬に富鉱脈（銅鉱）が発見されたのを契機に次第に好況を迎え、翌年にはこの場所での製錬が本格化し、以降年々藤田組による極的な設備投資が行われていく。明治38年(1906)第1発電所が完成し、それに伴い翌年排水ポンプや捲揚機などの電気機械設備が導入される。続く明治40年(1908)には第2発電所が、明治45年(1913)には清水谷発電所が建てられ、鉱山における機械化が急速に進められた。また、明治39年(1907)には銅製錬に生鉱吹が導入されて生産はいよいよ拡大し、大正2年(1913)には第2溶鉱炉が増築、明治47年(1915)には浮遊選鉱設備が次々と完成した。しかし、第一次世界大戦後の銅価格の低下や、アメリカ銅の輸出拡大によって藤田組の経営は打撃を受け、大正12年(1923)に至って大森鉱山は閉山を迎えることになる。その後重要鉱物増産法によって昭和14年から三木坑、村上坑、蔵本坑、永久坑等の旧坑の取明改修が実施されたが、昭和18年(1943)台風によって坑道が水没したため、翌年操業は休止となる。

現存遺構の概要

藤田組三木工場は、大田市大森町銀山の栃畑谷地区に所在する。観光坑道として知られる龍源寺間歩の出口付近から古道を南西へ300mの所に所在する。この工場の具体的な状況は明らかではない。唯一操業当時（明治21年(1888)）の写真（複製：石見銀山資料館所蔵）に木造平屋1棟と木造二階建の建物が見え、平屋に煙突があるのでこの施設が製錬場であろう。なお、藤田組は明治28年(1895)から資本20万円を投じ、清水谷地区に湿式製錬法による製錬所を建設した。これによって三木工場は閉鎖される。

現存する遺構としては工場の石垣があるほか、貯水槽、工作物を設置した基礎など都合5ヶ所確認される。貯水槽は平面積約10m×20m、深さは約70cmで、コンクリート仕様である。また、構造物は先の貯水槽の付近にあり、コンクリート製でコの字型（1.8m×2m、高さ0.7m）1ヶ所、もう1つはそこから直線状約10mの所にあり、煉瓦製で0.7m×1m、高さ0.7mである。これらの構造物は、何らかの工作物を設置するための基礎であろう。

（仲野義文）

〈参考文献〉

- (1) 『創業百年誌』「大森鉱山概況一斑」同和鉱業(株) 1914年
- (2) 『大森鉱山（石見銀山）資料集—明治・大正・昭和の稼行記録—』1982年



大森鉱山旧藤田組三木工場跡

所有者 同和鉦業株式会社

鉦床の概要と稼行状況

大森鉦山には仙ノ山（標高537.8m）を中心に東側の福石鉦床は銀を、西側の永久鉦床は銅を主要鉦物として産出する。福石鉦床は石英安山岩質凝灰岩中に胚胎される鉦床で、おもに仙ノ山の東側標高約280から470m、南北約500m×東西約700mの範囲に分布する。一方永久鉦床は石英安山岩中に胚胎される鉦床で、仙ノ山西側の南北約700mの範囲に分布する。石見銀山が発見された16世紀以降、鉦山の開発は仙ノ山を中心として行われ、近年の坑道調査では608口の露頭掘及び坑道跡が確認されている。

さて、藤田組による開発は先ず永久坑、龍源寺坑、蔵之丞坑、蔵本坑、大久保坑、金生坑等の旧坑から取明改修が着手された。経営当初にあっては良質の銀鉦石が期待される福石鉦床に重点が置かれたため、蔵之丞坑、大久保坑、金生坑の稼行に特に力が注がれた。その一方で明治23年(1890)には永久坑からの本格的な出鉦が始まると、次第に開発の中心は永久鉦床へと移っていった。しかし、坑道の深遠化によって、明治30年(1897)頃には坑内に大量の地下水が堪えるようになっていった。しかも地中150mから300mの地点で熱水が湧き出すようになったため、坑内の温度と湿度は上昇し、これによって操業は一時期困難な状況に陥った。その後明治32年(1899)内中瀬に有望な銅鉦脈が発見されたことを契機に状況は好転し、明治34年(1901)にはペルトン水車を、翌年には電動式ポンプを導入するなど積極的な設備投資が行われ、出鉦はさらに増加し、大森鉦山は再び好況を迎えることになる。

現存遺構の概要

大森鉦山内にある坑道跡（廃坑）の代表的な旧坑

道について報告する。なお、旧坑は既に島根県教育委員会によって調査が実施されているので詳細はそれを参照されたい。

蔵之丞坑は仙ノ山東側の清水谷地区に所在し、坑道は南西方向に900m程伸び西側の金生坑に通じている。坑口は原形をとどめている。

大久保坑は仙ノ山西側の本谷地区に所在する。昭和44年(1969)に国史跡に指定されている。坑口は若干崩落箇所が認められるが概ね保存状況は良好である。

永久坑は仁摩町大国柑子谷に坑口がある。延長1400m。南方向に掘進し、順に平井米鉦、黒鉦、山田鉦、兼鉦、馬之背鉦、佐藤鉦等の鉦脈が存在する。同坑は上部において三木坑、村上坑、蔵本坑、龍源寺坑等の諸坑と豎坑で通じ、その下部は30m毎に水平坑道を掘削し、永久坑道をゼロ番として以下順に番数で呼んだ。また、番と番の中間に中段を掘削し、さらに番と中段は坑井で繋いだ。この坑道は昭和18年(1943)の水害によって柑子谷川の川底に埋没し、かつての坑口は現存しない。

龍源寺坑は観光坑道として坑口より268mの区間が公開されており、当時の具体的な様相を伝えるものとして貴重な資料である。

関連資料の存在

坑道図面については竹下美行氏所蔵資料及び上野利治氏所蔵資料に収載する。 (仲野義文)

〈参考文献〉

- (1) 「大森鉦山概況一斑」『創業百年誌』同和鉦業(株) 1914年
- (2) 『大森鉦山(石見銀山)資料集—明治・大正・昭和の稼行記録—』同和鉦業(株) 1982年
- (3) 『島根県の地質』島根県 1985年

鉍業／平田市河下町金山／昭和12年(1937)

わにぶちこうざん

鰐淵鉍山は、平田市河下町（旧鰐淵村）にあり、黒鉍（銀・銅・亜鉛）と石膏を産出していた。

江戸末期から明治5年(1872)までは、松江藩によって開発され金山銅山と称していたが、本格的に採鉍するには至らなかった。

明治22年(1889)地方人某の経営に移り、鰐淵鉍山と称して銅鉍の採掘が5年間行われた。

明治29年(1896)大阪の藤田組（同和鉍業KKの前身）に移譲され、折から日清戦争の鉍山景気に乗って本格的な銅鉍採掘が始まり、明治33年(1900)には、年産1,280トンの業績をあげていた。

明治37年(1914)鰐淵鉍山合資会社に移り、この頃から国内で亜鉛鉍の精錬ができるようになった。それまで銅鉍の品位を上げるため廃棄されていた黒鉍が亜鉛鉍であることがわかり、精錬方法を改善し銅・亜鉛鉍の量産が行われるようになった。

明治45年(1912)からは、津和野町の堀鉍業の経営になり、銀・銅・亜鉛鉍の年産素鉍4,120トン、価額63,000円の規模であったが、大正9年(1920)の経済恐慌により休山となった。

大正9年(1920)鰐淵鉍業合資会社の手に移り、銅・亜鉛鉍を年産1,500トン前後に操短して継続したが、昭和5(1930)鉍業界の不況によって再び休山となった。

昭和12年(1937)昭和鉍業株式会社に移った年に日中戦争が勃発し、金属鉍山の開発・増産が重点国策となり、にわかに脚光を浴びるようになった。これにより、黒鉍（銅・亜鉛）採掘鉍山として各施設の整備・充実、従業員の増募、社宅の増設などをはかり、採掘量は飛躍的に増加し年産50,000トンを超えるに至った。

抗外施設では、大きな機械選鉍場を大歳谷に建設し、金山抗と大歳選鉍場の間に1,000メートルの隧道を貫通させ、電車軌道を敷設して鉍石を搬送した。軌道の中間には唐川川があるので、これをまたぐ高さ15メートルの鉄橋を設けて連結していた。

昭和20年(1945)終戦とともに鉍業界も激動をよぎなくし、黒鉍の採掘を中止して推定埋蔵量100万トンといわれる別所白滝石膏鉍床の開発をはじめた。

昭和28年(1953)には、規模の大きい黒鉍（銅・亜鉛鉍）の鉍体が発見され、昭和29年(1954)から一部の採掘をはじめた。

黒鉍の生産量は、昭和40年(1965)に銅鉍2,070トン・亜鉛鉍3,294トン、昭和41年(1966)に銅鉍1,591トン・亜鉛鉍5,094トン、昭和42年(1967)に銅鉍801トン・亜鉛鉍5,017トン、昭和43年(1968)に銅鉍183トン・亜鉛鉍3,952トン、昭和44年(1969)に銅鉍122トン・亜鉛鉍2,508トンであった。

石膏の生産量は、昭和35年(1960)頃から飛躍的に増大し、昭和39年(1964)には、年生産量214,000トンを記録して量・質ともに日本一の石膏鉍山であった。

しかし、昭和40年(1965)代に入ると化学工場の副産物として出る低価格の人工石膏のため経営不振となり昭和53年(1978)遂に休山となった。

鉍石搬送電車は姿を消し、軌道は撤去されたが唐川川（川幅約60メートル）に設置されていた6基（水面からの高さ約15メートル）の橋脚は、当時の姿をそのままとどめ、活況を呈した時代をしのぶことができる。（河原喜久夫）

＜参考文献＞

- (1) 『わにぶちの鉍山誌』平田市鰐淵公民館 1995年
- (2) 『鰐淵鉍山の概要』昭和鉍業株式会社鰐淵鉍業所 1970年
- (3) 『簸川郡名勝誌』簸川郡私立教育会 1908年
- (4) 『島根県大百科辞典』山陰中央新報社 1982年



鉍石搬送電車軌道橋脚

鱶淵鉍山で石膏を採掘するようになったのは、明治38年(1905)頃からであるが、昭和12年(1937)昭和鉍業株式会社の経営に移ってから本格的に採掘がおこなわれ、戦後に最盛期を迎えている。

石膏鉍床は、新第三紀中新世の地層で緑色凝灰岩と黒石頁岩の境界部に胚胎している。

石膏鉍石は、硫酸塩鉍物のひとつで白色ないし無色透明をしていて、ときに淡い黄色やピンク色のものがある。繊維状のものは繊維石膏、塊状半透明のものは雪花石膏とよび、黄銅鉍・黄鉄鉍・硬石などを共出することがある。

金山と別所の鉍体は、東西1,000メートル、南北250メートルで北に40～45度傾斜し、鉍厚の平均は15～20メートルあった。

採掘は、地下150メートルの主坑道から上下に坑道が延びて最も深い所では、地下250メートルに達し、海面より170メートルも低くなっていた。

鉍石の搬出は、上部坑の鉍石は坑内の立坑漏斗で主坑道に集め、下部坑の鉍石は200馬力の巻上機によって主坑道に集めて坑外に運送していた。

石膏の粗鉍は、選鉍場において選別していたが、石膏とともに共存する母岩の頁岩は、一般に粘土化していて粗鉍を破碎すると石膏塊より小さな破片ないし混状化する。これを流木の中で篩別して微粒子を洗いとり、篩の目を次第に小さくしながら数回繰り返して品質をよくする方法をとっていた。

石膏の生産量と従業員の推移は、昭和30年(1955)に36,000トン・264人、昭和35年(1960)に165,000トン・622人、昭和39年(1964)に214,000トン・800人、昭和40年(1965)に166,000トン・442人、昭和45年(1970)に224,000トン・415人、昭和50年(1975)に164,000トン・240人で、生産量と従業員が最も多かったのは、昭和39年(1964)の214,000トン・800人であった。

石膏の出荷先は、セメント工場が主体である。セメントは、石灰石を主な原料にして成分調整のため粘土・火山灰・スラグなどのけい酸材料を約20%配合し、1,400～1,500度で焼成する。これに約3%の石膏を加えて製品化している。

輸送は、鉄道と船舶を利用していて鉄道輸送は、

一畑電気鉄道KK平田市駅を經由して国鉄を利用し、同駅までの12キロメートルは、トラックで一日約400トン搬出していた。船舶輸送は、1,000トン級の船が接岸できる河下港を利用し、同港までの2.5キロメートルはトラックで一日約2,000トン搬出していた。貨物船は150～700トン級が約30隻就航して船腹送鉍能力は、約10,000トンであった。

石膏鉍山としては、量・質ともに国内トップの地位にあったが、昭和40年(1965)代に入り、化学工場の廃棄副産物が技術開発されて燐酸石膏(人工石膏)に生まれかわるようになり、天然石膏の価格が暴落したため、40年間続いた山の灯も昭和53年(1978)に消され休山となった。

昭和53年(1978)から昭和開発工業株式会社が休山した鱶淵鉍山の表層岩石を一般の土木建設用資材として出荷するため採石をはじめた。

昭和30年(1955)代、石膏鉍山最盛期の選鉍場跡は、コンクリートの場所が現存しているので、これを製品の集積槽に利用している。同槽は、高さ約11メートル、幅約13メートル、奥行約13メートルあり、土木建設資材供給会社の主要な施設に生まれかわり新しい使命を果している。(河原喜久夫)

〈参考文献〉

- (1) 『わにぶちの鉍山誌』平田市鱶淵公民館 1995年



鱶淵鉍山石膏選鉍場跡

所有者 宍道町

通称^{みさいだに おおいわ}三才谷の大岩と呼ばれた来待石の採石場跡である。ここは来待石山と採掘場跡の崖および石畳(石舞台)と広場で構成されている。面積は約16,000m²、一角に残る絶壁の高さは約25m、幅約80m。壁面には斜めの筋もようが広がり絶景とも言える。マサカリという道具を使って手作業によって石を切り出した際についた切り跡である。

この採石場は、明治25年(1892)頃より、昭和30年(1955)頃までの約60年余りの間にわたり、10軒の採石業者によって操業されていた。当時この石山は久戸、浜地区の共有山林であり地区民は無料で切り出すことができた。採石業者の1人であったT氏(83歳)は戦前戦後の様子を「みな家族労働であり、1軒あたり幅約10mに分割、山の上面から手作業で縦に筋を入れて切り下げて行ったものだ。三才谷の石は主に建材用として、土台石や敷石を作った。それをねこ車(手押一輪車)に積み、宍道湖岸の船着場まで約700mを人力で運び出し、松江市等の業者に売り渡した」と語っている。

昭和30年(1955)代以降この石山は閉鎖、放置されていたが、平成8年(1996)来待ストーンミュージアム石の広場として整備され、遺跡として広く公開できるようになった。

来待石は、宍道湖南岸の宍道町東来待を中心として、東は玉湯町、西は宍道に亘る延長約10km、幅約1.2kmの地帯に産出する凝灰質砂岩で、採掘加工が容易であり様々な製品に加工利用されてきた。

古くは6世紀後半に造られた古墳の石室に来待石を切り出し組み立てたものが幾つか見られる。中世には、石塔、石碑、建材等として重用された。西来待の大五輪塔、広瀬町の尼子清定、経久、堀尾吉晴、忠晴の墓など残っている。

江戸時代松江藩は来待石を他藩へ無許可で移出することを禁じ、別名「御止石」^{おどめいし}の名を残すほど珍重された。石工職人は藩の許可を得て「原石の切り出し」を専門とする人、「石屋」として加工する人に分業された。来待地区の人々は、「原石の切り出し」を主とし、宍道湖の水運を利用、湖岸の船着場から

船で原石を松江まで運び、松江城下の石屋によって加工された。

明治末期になり地元で来待石販売組合を設立、加工技術を導入し、加工・販売が次第に伸びた。大正・昭和にかけて石灯籠、墓石、石碑、搗石、井戸側、棟石、敷石等の需要が多く各地に出荷された。昭和10年(1935)代以後になるとセメントが普及し、建材としての役割は減少した。

戦後は来待石加工組合(昭和31年(1956))を結成し、石灯籠を中心とした量産体制ができ、生産は急激にのびた。その後伝統的工芸品としての指定を受け、今日も16業者によって加工・販売が続いている。

来待石の切り出し、加工が数100年に亘り続いていたことは、それだけの石切場が存在したのであり、町内に10数か所の石切場跡が残っている。

来待石石切場跡の本格的調査は、中国横断自動車道尾道松江線の建設工事に伴い、島根県教育委員会により平成8年(1996)度から文化財発掘調査が実施された。東来待では小三才谷遺跡ほか3か所、西来待で三反田遺跡ほか4か所、合計9か所である。報告書には採石場の規模、採石の時期・技法など実測図、写真と共に詳しくまとめられている。

(犬山英男)

<参考文献>

- (1) 『宍道町誌』1963年
- (2) 『来待石の採石と加工(宍道町ふるさと文庫3)』宍道町教育委員会 1990年
- (3) 『来待石石切場遺跡群』島根県教育委員会、日本道路公団 1999年



来待石石切場跡

所有者 同和鉱業株式会社

施設・設備の概要と変遷

大森鉱山における事業概要については別項で詳述しているので、ここでは施設・設備の概要とその変遷を述べておきたい。

同鉱山は大森町銀山側の銀山部と、仁摩町大国町柑子谷側の永久部とに分かれており、操業当初にあっては銀山部に鉱山事務所が置かれた。しかし、永久坑での本格的な出鉱や、清水谷製錬所の閉鎖を背景として、明治29年(1896)には鉱山事務所を含め主要施設は永久部に移転され、大正12年(1923)の閉山までここが藤田組の拠点となる。

さて、永久部は潮川上流の仁摩町大国字柑子谷に所在する。ここは要害山(山吹山)の北麓を北西に延びる谷間で、鉱山関係の諸施設はその谷筋を流れる柑子谷川に沿って建設された。大正3年(1914)の「大森鉱山概要一斑」によると、この地には鉱山事務所1棟を含め、製錬所5棟、選鉱場6棟、汽罐場1棟、木工場1棟、火薬庫2棟、火薬類貯蔵庫2棟、倉庫4棟、鍛冶・鋳物場1棟、役宅及長屋43棟、出合発電所1棟などの諸施設があり、この内川を挟んだ西側には鉱山事務所及び倉庫や火薬庫などが、東側には選鉱場、製錬所、鍛冶・鋳物場などがそれぞれ配置された。労働者の長屋は概ね永久坑口より南側に集中して建てられた。また、「大森鉱山全図」によれば、工場地内には鉱石や製品を運搬するためのトロッコ用の軌道が敷設され、それらは永久坑口より延び元粗選鉱場で分岐し、一方は選鉱・製錬所へ、また一方はずり捨場へと通じていた。鉱山事務所付近の小山にはインクラインが設置され、坑口及び製錬所から運ばれた寢や捨石はこのインクラインによって高さ約30mの頂上に運ばれ、北側斜面へと投棄された。また、ずり捨場の側には選鉱場及び製錬所からの出た汚水を浄化するための沈殿池(6層)があり、浄化水は柑子谷川へと排出された。

現存遺構の概要

永久工場の諸施設は昭和18年(1943)9月の台風によってその多くが倒壊したほか、鉱山の操業休止(昭和19年(1944))に伴って電気設備や社宅などの被害

を免れた施設設備が同社の花岡、柵原鉱山等に移築されている。そのため永久工場関連の遺構については、僅かに選鉱場、煙道、ズリ捨場、社宅が現存する程度である。

選鉱場は選鉱施設は、永久坑口から北に元粗選鉱場、一号選鉱場及び選鉱見張、大割場、二号選鉱場、捨石舎、三号選鉱場の順に建設されていたが、遺構として確認されるのは3号製錬場の石垣である。高さ約2m、幅約10mが現存し、状態は良好である。

ズリ捨場は仁摩町の浄水場(旧沈殿池跡)に隣接し、現在は安全柵(約90m)で囲まれている。敷地内の調査ができなため大森鉱山時代の工作物等の残存状況は不明である。

社宅は要害山の東側「牛の首」に通じる道沿いに所在する。「大森鉱山全図」によると大正頃にはこの場所には炭小屋が描かれているが、地元の話では昭和期の開発に伴い現在の社宅が建てられたという。木造平屋で間口1間、奥行3間で、棟割に4棟存在する。

関連資料の存在

「大森鉱山全図」 竹下美行氏所蔵

「工作物ニ関スル届書綴」 上野利治氏所蔵

「永久工場写真」 石見銀山資料館所蔵

(仲野義文)

＜参考文献＞

- (1) 「大森鉱山概況一斑」『創業百年誌』同和鉱業(株) 1914年
- (2) 『大森鉱山(石見銀山)資料集—明治・大正・昭和の稼行記録—』同和鉱業(株) 1982年



大森鉱山永久部(選鉱場跡)

鋳業／邇摩郡仁摩町大國町柑子谷／同和鋳業(株)／明治30年(1897)

所有者 同和鋳業株式会社

事業の概要・沿革

大森鋳山は永久坑での本格的な出鋳を背景として、次第に銅生産に重点が置かれるようになる。とりわけ、明治42年(1909)の生鋳吹の導入はその傾向に一層の拍車をかけることとなった。

生鋳吹(自溶製錬)とは、硫化銅鋳を溶鋳炉にそのまま装入し、含有硫黄の酸化反応熱を利用して製錬する方法で、明治35年(1902)同じく藤田組経営下の小坂鋳山において開発、採用されたものである。この方法は前述の如く鋳石自体に含まれる鉄と硫黄の酸化反応熱を利用するため、コークスなどの燃料が少なく済むほか、溶鋳の大量処理が可能であったため、この開発はわが国の銅製錬において画期的な技術革新となった。

本鋳山でも硫化銅を製錬するため、明治42年(1909)7月これまで使用してきた溶鋳炉2座の内1座を粘土溶鋳炉から水胴式に改め、生鋳吹による銅製錬が開始される。なお、水胴式炉は、水胴84cm、高さ90cmの円筒形で、3個の鑄鉄(厚さ9cm)からなり、鑄鉄と鑄鉄の間には水を容れる鉄管が取り付けられ、終始水が循環するようになっていた。

さて、生鋳吹では塊鋳は生鋳のまま、また粉鋳は焼結鍋で焼結鋳にし、これを先の水胴式溶鋳炉に装入し、溶剤として石灰石及びドブを加え、主用燃料としてコークスを炉頂より投入し、補助燃料として石炭を羽口より挿入した。熔体は前床において銅皮と鋳滓に分離され、銅皮は真吹の工程に送られ含金銀鉛型銅が造られた。大森鋳山で生産された型銅はさらに小坂鋳山へと輸送され、そこで電気製錬が行われた。この生鋳吹の導入以降、大森鋳山の生産量は漸次増加し、大正6年(1917)に至って型銅量は過去最高488.7トンに達した。

永久工場における製錬施設は、要害山西側牛首に通じる谷筋に集中し建設され、それらは溶鋳場、焼結場、製銅場(送風機室)、分析所、鋳舎、製錬煙道及び煙突、製錬貯水池などで構成された。ま

た、設備としては次のようなものが備わっていた。

焼結鍋(上径6尺、深さ3尺)	1座
焼結鍋(上径7尺、深さ4尺)	1座
水胴式炉	1座
真吹炉	5座
送風機(英国スウェーツ社製)	1台
送風機(英国セーエツチエンドエフエムツール社製)	1台
水衝捲揚機	1台

現存遺構の概要

現存遺構は煙道2ヶ所である。何れも鋳滓を材料とした「カラミ煉瓦」によって構築されている。この煙道は溶鋳場及び焼結場から続くもので、製錬場の向かいの斜面に沿って延びている。『工作物ニ関スル届書綴』によると、これは水胴式炉の導入に伴って新設されたことがわかる。

新設当時の煙突及び煙道は、煙突高さ120cm、煙道高低76尺、総延長は190尺であり、この内現存遺構は「塵室」と呼ばれる部分で、1つは円筒形のもので、もう1つはアーチ状の半筒形のものである。前者は直径約2.5m、高さ約4m、後者は約1.5m×約1.7m、奥行約2mである。

保存状況：仁摩町指定文化財

関連資料の有無

「大森鋳山全図」竹下美行氏所蔵

「工作物ニ関スル届書綴」上野利治氏所蔵

(仲野義文)

〈参考文献〉

- (1) 池田謙三著「銅製錬」1935年
- (2) 「大森鋳山概況一斑」『創業百年誌』同和鋳業(株) 1914年
- (3) 『大森鋳山(石見銀山)資料集-明治・大正・昭和の稼行記録-』同和鋳業(株) 1982年



大森鋳山永久坑溶解場煙道



大森鋳山永久坑溶解場煙道

所在地 美濃郡美都町山本
所有者 中外鉦業株式会社

地質

地質は、西南日本内帯に属し、粘板岩、砂岩、珪岩、緑色岩及び石灰岩より構成され、他地域の秩父古生層と同様に二畳～石炭紀のものとされる。この層に新しいあるいは附近に露出している花崗岩、石英斑岩等の火成岩類の貫入によって軽度の動力変性作用及び熱変性作用を受け、接触交代鉦床（スカレン帯）を形成したものである。

鉦床と坑口

鉦床は、都茂、丸山鉦床の2群に大別され、北から矢対、都茂、旭坑、嵯峨谷、芋尻、宝来、丸山（官林、山神、千人間歩、古銀山、大路頭）、空山鉦床などがあり、鉦床の殆どが芋尻珪岩層及び粘板岩珪岩互層中に分布する。鉦石鉦物は黄銅鉦、閃亜鉛鉦、方鉛鉦、磁硫鉄鉦、磁鉄鉦よりなり金銀の含有も高い。

都茂鉦床は、概ね脈状に発達し南北に300mを超え、丸山鉦床は、芋状に発達し一大スカレン鉦物帯を形成している。

沿革

都茂丸山銅山については、「続日本後紀」巻第五に836(承和3)年11月15日石見国において幹了百枝4人に採銅・製錬の技術を習得させた記事がある。また、「日本三代實録」巻第卅九には、881(元慶5)

年3月7日陽侯忌寸氏管轄下の銅工人、膳伴氏と眞髮部氏が石見国美濃郡都茂郷丸山で銅鉦石を発見したので紀朝臣氏と眞髮部氏が校閲を行った記事があり、古代から銅採掘が行われてきたものと考えられる。

中世末期の天正年間（1573～1591）には銀産出に伴い再開されたとされ、1609(慶長14)年には都茂村のうち大字山本（大神楽除く）、澄川村のうち谷口溢が石見銀山領（津毛村）となり盛況であったが、慶安年間（1648）に坑内の湧水により採掘困難となり休山、その後1800年代半ばには浜田藩領となる。

この丸山鉦区は1878(明治11)年に広島府の藤野得一郎が再び採鉦を始め、1900(明治19)年には北山武敬（旧浜田藩士）、堀藤十郎礼造（津和野畑迫村）、矢野賀一郎（愛媛）ほかが経営した。鉦夫は数100人いた時期もあり、1912(大正元)年にはドイツ人ウルー氏による亜鉛鉦の採掘も行われた。

都茂鉦区は、1907(明治26)年頃発見せられ、新治鉦山、深折鉦山と称して、幾多の鉦業権者により稼行した。特に1938(昭和13)年には都茂鉦山(株)が所有し、1943年1月からは協和鉦業(株)の経営（銅・鉛・亜鉛）となり、この間軍需産業として国の支援が行われ、銅鉦採掘とともに日処理30tの浮遊選鉦場が建設された。

1946(昭和21)年休山、1951(昭和26)年中外鉦業株式会社が買収、都茂旧鉦の取明け改修と丸山鉦区の銅亜鉛鉦により浮遊選鉦場も修理復旧され、翌年12月から運転が開始された。



都茂鉦山選鉦場跡



都茂鉦山選鉦場跡・坑口

1959(昭和34)年丸山鉱床の下部で探査銅品位1.2%の鉱床発見後から最盛期(昭和35~49年)を迎え、従業員200数十名、1973(昭和48)年には700t/日稼動となっていたが、国内鉱業衰退の中、1979(昭和54)年稼動縮小、1986(昭和61)年3月には閉山となった。

選鉱場

閉山前の選鉱場は、銅鉱及び灰重石(タングステン)の自山鉱のほかに金銀鉱の委託選鉱が行われていた。銅鉱は破碎(ジョークラッシャー、コーンクラッシャー等で12mm以下)、磨鉱(ロッドミル、マーシーボールミルによる破碎)、浮選(銅品位22%)、精鉱処理(脱水処理)の工程を経て、製錬所に直送されていた。

選鉱場の施設設備は、平成3年に海外に売却されたため今はなく、現存する遺構は、建物の基礎である山肌のコンクリート(石垣部もあり)と一部の木造建物などである。ここは1964(昭和39)年から抜本的に改造(拡張、機械化)されてはいるが、それ以前の明治時代の遺構もあるものと思われる。北向きの建物跡地は5段、一番高い地点には鉱石の搬出坑

口があり、最下部の建物との段差は約20mある。一番広い面は幅(東西)に約40m、奥行15mある。

丸山通銅坑口

中外鉱業による採掘の主体は丸山鉱床で、坑口(0mレベル)地点から570m地点にある地下275m坑道までの丸山大立坑(-310m)で連絡し、その間を25m間隔で開坑展開していた。鉱石の搬出は-75m地点の選鉱場までの大通洞(1550m、延長1700m)により逐電機関車(6t)で運搬された。

山神坑周辺

主坑道(+80mレベル)は、近代の採掘により大幅に変わっているが、入口周辺にはノミによる手掘り跡が見られる。周辺には焼き釜跡、ずり、山神社跡、安養寺跡等のほか、切図にはその前身の「正福寺」、「銀山町」などが、また尾根筋には坑口や露頭跡があるが未踏査である。

(河野敏弘)

<参考文献>

(1)「事業概要」中外鉱業株式会社都茂鉱業所 1971年7月

1. 建造物の所在地域

神戸川は、広島県境の女亀山の北麓に源を発し、北流して大社湾に注ぐ延長81kmの2級河川で、流域面積は471km²あり、降水量は3,100m³/SECを測る。発電所は、この豊富な水量を持つ神戸川の中流域に所在している。

2. 建造物の概要

恵まれた水源を利用した発電所建設計画は、出雲電気株式会社(中国電力株式会社の前身)により大正2年(1915)年から2年の期間と総工費16万円を費やして先ず佐田町一窪田に最大出力600Kwhの窪田発電所が建設された。

引き続き大正11年(1924)には、佐田町八幡原

地内に堰堤を築いて5kmほど下流の出雲市乙立町に水を引く発電所の建設が開始された。3076mの隧道と919mの溝渠で導水し、水量毎秒56m³で、落差34m、最大出力1500Kwhの乙立発電所が大正13年(1926)に完成した。

61.6坪のコンクリート製の建物に、スパイラル横軸型、450回転、電圧3500V、60サンプルの発電機を据え付けて事業を開始した。

(片倉愛美・宮澤明久)

〈参考文献〉

- (1) 永田慈史『神戸川探訪』(出雲市民文庫15)1997年
- (2) 『乙立史』1954年



中国電力(株)乙立発電所

電力/益田市猪木谷町/中国電力(株)/昭和3年(1928)

匹見川水系の豊川、匹見発電所の地勢、地域史概略をまとめて述べる。

(1) 地勢

高津川は西中国山地に源を発し、匹見川、津和野川など多くの支流を集めて、鹿足郡・美濃郡一帯から益田市に流れる総延長80kmの大河である。

『発電水力調査』大正3年(1914)によると、「本流は上流水源に於て尚海拔400mを超えず而も屈曲甚だ多き為、水面勾配緩く六日市より下流に於ては百分の1以上の箇所なく、兩岸開けて耕地に富み、河床砂礫を見るも、岩盤の表わるるが如き箇所、殆ど無し。」

とあり、高津川上流部の評価は低い。

柿木から日原までの十数kmは、岩盤で奇岩、巨石、早瀬が多く見られ、深いV字溪谷を作っている。

(2) 地域の概略

高津川水系では、本流よりも支流の匹見川で水力開発が先行した。中電の発電所は、匹見川で3ヶ所あるのに対して、本流では日原発電所(昭和13年(1938))のみである。匹見川はその広大な流域、水量の多さ、急流などの理由で、早くから電源開発で注目された。

『発電水力調査』大正3年(1914)に、「道川村大字下道川より匹見下村に至る間流程7里の間は随所に之れを利用するに足るべし」とある。現在、匹見川水系では豊川(昭和3年(1928))、匹見(昭和3年(1928))、澄川(昭和18年(1943))の3つの発電所が稼働している。川沿いで小低地として、澄川と豊川があり、この小低地に各発電所が建設された。

(3) 立地

発電所：益田市猪木谷町字廿一地先

取水口：美濃郡匹見町大字澄川字新田後イ2243番地(豊川取水ダム)および大字澄川字猿候淵イ1294番地(谷口川取水ダム)。

他に柿原谷・猪木谷で溪流取水がある。

(4) 沿革

出雲電気(株)は、電力不足を補うため、益田地方で、受電補給や発電所の新設に努力した。昭和3年(1928)9月には、旧豊川村猪木谷に水力発電所を建設した。総工費二百数十万円の巨費を投じ、出力4万7千kWで、当時としては県内最大の発電所であった。また、匹見川水力



中国電力(株)豊川発電所

電気工業(株)が昭和3年(1928)完工した匹見発電所からは、全発電量を受電した。

豊川発電所の稼働で、昭和25年(1950)から年間70万円の償却資産税が旧豊川村の財政に入り、村財政は潤ったという。

(5) 発電施設

① 発電施設

発電開始：昭和3年(1928)9月18日

発電所形式：水路式

発電所出力：4670kW

使用水量：8.07m³/s

有効落差：77.47m

発電機1：(安川電気製作、昭和2年(1927)5月製造)

種類 HS型

出力：2460kW 電圧：6.6kV

力率：0.95 回転数：720rpm

水車(イームル工業製、昭和60年(1985)製造)

形式：横軸フランシス水車

出力：2800kW および2700kW

② 堰堤：石張りコンクリート重力ダム(豊川取水ダム)

堤高6.21m、堤長64.54m

③ 導水路：

幅員 2.485m

高さ 2.485m

全長 7877.89m

途中1ヶ所に沈砂池あり。また、谷口取水ダムからの鉄管は匹見川をまたぎ、豊川取水ダムからの本管と結合している。

④ 水路橋：なし

⑤ 建屋：

1階平屋 セメントブロック造

建坪 442m²

(6) 特徴

外観からは、緩やかな傾斜屋根を持つ白亜の建物である。窓枠は1階が四角形、2階がアーチ型に3つの小窓を設けている。建物上部に装飾を施し、全体的におしゃれな外観となっている。統一されたセンスの良さを感じる。作業用入り口もアーチ型で、上部の壁にはアーチ構造の線刻が見える。

内部は鉄骨の梁構造で緩やかな屋根を支えている。2階窓内側とともに、1階窓内側上部も壁面をアーチ型に仕上げている。(岡崎秀紀)

〈参考文献〉

- (1) 『益田市史(下)』1952年
- (2) 『益田市誌(下)』1978年
- (3) 『石見匹見町史』1965年

電力/平田市園町/一畑電気鉄道(株)/昭和2年(1927)

一畑電気鉄道株式会社の前身である一畑軽便鉄道株式会社が、初めて汽車を走らせたのは大正3年(1914)4月で第一次世界大戦による戦時景気の頃であったが、会社の経営は極めて厳しかった。

営業開始直後の大正3年(1914)度上半期の営業成績は、33日間の総収入2,484円で、一日平均ではわずかに75円余りであった。

会社の経営陣は、この苦境から脱出するため必死の努力を続けたので大正5年(1916)から大正10年(1921)までの5年間の営業成績は、乗客が208,200人から302,800人へと約50%伸び、貨物が2,372トンから6,100トンへと約2倍半の伸びとなっている。

しかし、抜本的な経営改善をはかるには、路線を松江市と出雲大社へ延長して宍道湖北岸一帯を結ぶとともに軽便鉄道を電気鉄道に切りかえねばならないと考えていた。

大正13年(1924)9月、会社の“当社延長線計画の概要”に次のように述べている。「電車は汽車と違い煤煙もなく乗心地がよろしい。又運転の時間も現在の2時間間隔を3、40分間隔に縮められるので便数を約3倍に増すことができます。

スピードアップも可能です。その上に電車は車輛が大きいから輸送量がぐっと大きくなります。

経費も電力も格安に契約したから経済的になるはずです。かような次第でこの延長線は電車とする計画を立てました。又、国鉄山陰線が全通してから後、会社の現在の路線は乗客も貨物も激増していますので、この状態で進みますと現在の軽便鉄道では、到底輸送に堪えられなくなりますので、改良の必要に迫られているのであります。

そこで、この際この営業路線の電化改良をいたしますと同時に、松江市に至る延長線を敷設して湖北線を完成することは、会社の創立以来の使命であります。ここに諸氏とともに本路線の敷設が地方のため一日も早からんことを希うものであります。」

昭和2年(1927)に出雲今市～一畑間を電化するため平田市園町に「^{ぬのざき}布崎変電所」を新設した。

電気は交流と直流があるが、発電所で起す電気は交流である。直流は一定方向に流れる電流で、交流は一秒間に数回またはそれ以上、流れの向きを変え

る電流である。

一畑電気鉄道の電車で使用する電気は直流を使用するので、変電所を設けて電圧を調整し、交流を直流に変換する必要がある。

布崎変電所は、16.38m×12.73m、208.5m²鉄筋コンクリート平屋建で、この建物に3相3線式変圧機、シリコン整流器、遮断器、避雷器、配電盤などの電気機器を設置し、さらに機械室、事務室、倉庫も付設している。

変電所では、中国電力から受電した交流の33,000Vを変圧機で1,500Vに変圧をし、さらにシリコン整流器によって交流を直流に変換して電車に送電をしている。

戦後、電車の設備が近代化したことに伴ない使用電力が増加し、布崎変電所のみでは困難となったので、平成7年(1995)7月に松江市西浜佐陀町に「古江変電所」を新設、続いて平成8年(1996)には、出雲市武志町に「川跡変電所」を増設して、現在は3か所の変電設備によって安全運行をおこなっている。(河原喜久夫)

〈参考文献〉

- (1) 一畑電気鉄道株式会社鉄道部資料
- (2) 『ふるさと平田の昔話』平田市文化団体協議会 1986年



一畑電気鉄道(株)布崎変電所

(1) 地勢

木次町湯村地区は、斐伊川の中流部にあたる。西日登を過ぎると、斐伊川の兩岸は急に狭まり、溪谷となって迫ってくる。湯村は大原から仁多方面への通道にあたり、古くから温泉で知られた。『出雲風土記』に「川邊に薬湯(くすりゆ)あり」とある。川は漆仁川(しつにのかは)と呼ばれ、現在でも、川岸に温泉が湧き出ており、露天風呂がある。

(2) 地域の概略

湯村より上流の旧仁多郡温泉村大字北原の地に、明治44年(1911)松江電燈(株)によって起工された北原発電所があった。大正元年(1912)12月より、運転を開始し、松江はじめ木次、大東、斐川方面に送電した。

北原発電所が送電を開始して、大正3年(1914)には下布施地区の6軒の民家に電燈が灯った。民家横には、これを記念する電燈記念碑が建てられた。生活仕事が大きく変化して、電気普及への感謝の気持ちが刻まれている。大正8年(1919)湯村発電所が建設されると、電燈もこの地域に普及していった。

(3) 立地

発電所：大原郡木次町大字湯村1527番地

取水口：大原郡木次町大字平田669番地。

湯村発電所は、斐伊川の急傾斜の谷にへばりつくように、河岸に建っている。取水口は上流の平田ダム(日登発電所取水ダム)である。

平田ダムの100m上流に斐伊川水系最大の北原発電所がある。本流の斐伊川ダムから取水した水は、阿井川ダムを経由して、北原発電所の水車を動かす。排水は再び平田ダムで再度取水され、湯村発電所および日登発電所に導かれる。日登発電所の下流にある北原発電所逆調整池は、下流での農業用取水対策のために設けた、全国的にも珍しい施設である。

(4) 沿革・由来(建設経緯・社会背景)

電力需要の伸びに対応して、当時の出雲電気(株)(明治44年(1911)11月28日創立)によって建設された。

(5) 発電施設**① 発電施設**

発電開始：大正8年(1919)11月

発電所形式：水路式

発電所出力：1000kW

使用水量：5.57m³/s

有効落差：27.88m

発電機1基(川北電機製：大正19年(1920)製造)

種類：HS(型)

出力：1250KVA 電圧：6.9KV

力率：0.85 回転速度：600rpm

水車(イームル工業(株)製、昭和61年(1986)製)

形式：横軸フランシス水車

出力：1230kW

② 堰堤(平田ダム)

堤高4.35m、堤長49.22m

③ 導水路

幅員 1.94~2.16m

高さ 2.08m~2.14m

全長 2141.59m

途中に1ヶ所、沈砂池がある。

④ 水路橋：なし**⑤ 建屋：構造**

1階平屋建RC造、屋根折版葺、建坪200m²

(6) 特徴

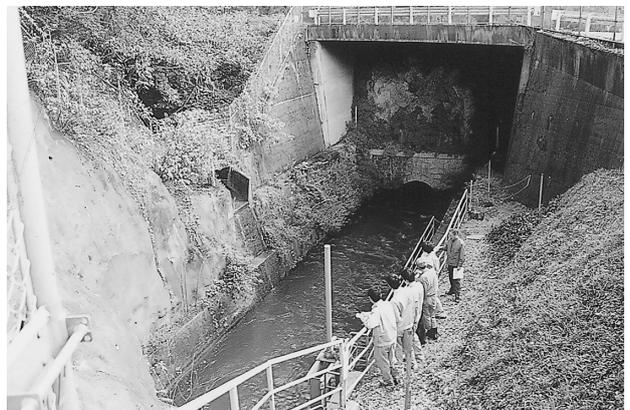
発電所建物は箱型で小さくまとまり、斐伊川右岸の絶壁に張り付いている。大正期の建物という印象はない。

取水口の平田ダムより最初の隧道出口が、国道314号線の横に観察できる。地上より約10m下に、高さ2mを越すトンネルが掘られており、水量豊かに流れている。トンネル入り口は石積みアーチ構造である。途中の沈砂池でもこのようなアーチ構造が見られる。

(岡崎秀紀)

<参考文献>

(1)『木次町誌』1972年



中国電力(株)湯村発電所への導水路 ※アーチ構造に注目

(1) 地勢

神戸川の水源は中国山地の大万木山、女亀山一帯である。赤来町、頓原町より佐田町を経て出雲市に入り、立久恵峡の溪谷美を刻み、出雲平野を通過して大社湾に注ぐ、総延長約80kmの大河となる。上流部の赤来町来島ダムを過ぎると流れは急流となり、大きく蛇行しながら、兩岸岩肌の谷間を作る。中流域の佐田町一窪田(ひとくぼた)地区に入ると、比較的まっすぐな流れとなる。この蛇行地形から平坦地に落ちる地形構造が水力発電適地となった。

『発電水力調査』(大正3年(1914))には、「志々村(現・頓原町八神地区)を去る頃より復た山間部に入り、勾配平均124の1を保ち、山口村(現・大田市山口)に至りては屈曲益々甚だしく、河床安定にして岩盤を表わす箇所多し。乃ち利用はこの範囲とす」とある。

(2) 地域の概略

窪田発電所が送電を開始し、旧窪田村は大正5年(1916)1月1日から電灯がともされた。現佐田町内ではいち早かった。須佐地区はこれより遅れること7年、大正12年(1923)1月より点灯した。

窪田発電所開設の頃の電気事情が、「電線、電球その他諸器具は平素大切に取扱われ度之を玩弄び又は濡れ手にて取扱われることは堅く御断り申します。

「コード」線を金属に触れしむる時は、被覆を損傷する虞がありますから、自在球の外は決して釘などに懸けられぬ様願います。

「コード」線その他電気器具を弄するときは電気に感ずることがありますから点滅器(キー)の外は成るべく触れぬ様、小供衆又は御召使の者などには特に御注意を願います。」と『佐田町史』にある。

大正4年(1915)完工した窪田発電所の下流10km地点に、乙立発電所が大正13年(1924)建設された。佐田町八幡原栗畑で神戸川を堰き止め、約5kmの導水路を造り、水を出雲市乙立町殿川内大呂峠に引き、落差34mを得て発電した。

神戸川水系の発電所、窪田・乙立が完成し、出雲地域の電力供給の中心となった。

(3) 立地

発電所：簸川郡佐田町大字一窪田字堂の原前1809番地

取水口(窪田取水ダム)：簸川郡佐田町大字一窪田字川崎1713番地

(4) 沿革

県下で松江、浜田に次いで3番目の電力会社として、出雲電気が明治44年(1911)11月28日に設立された。発電は神戸川の水力開発が間に合わなかったため、出雲市大津にガス力による123kWの発電所を建設し、大正元年(1912)8月12日から営業開始した。供給地域は、当初、今市町と大津町で大正元年(1912)末の電灯需要は、戸数1759、灯数3600であった。

需要増・供給地域拡大に應えるため、出雲電気は神戸川水系、佐田町一窪田に水力発電所を建設することになった。大津ガス発電所は廃止された。



中国電力(株)窪田発電所全景と窓アーチ構造

大正6年(1917)に松江電気と合併にいたるまでの状況は、供給地域は逐次拡大し、杵築町平田町高松町を含むほぼ簸川郡全域4町27村に及んだ。大正5年(1916)ころの需要家数5,638戸、灯数9,817灯となった。

(5) 発電施設

① 発電施設：

発電開始：大正4年(1915)11月

発電所形式：水路式

発電所出力：600kW

使用水量：2.92m³/s

有効落差：28.79m

発電機2基（東芝製：大正4年(1915)および大正8年(1919)製造）

種類：HS（型）

出力：350KVA 電圧：7.0KV

力率：0.80 回転数：720rpm

水車（イームル工業(株)製、平成元年(1989)および平成2年(1990)年製）

形式：横軸フランス水車

出力：340kW

② 堰堤：堤高3.94m、堤長48.48m

石張りコンクリート重力ダム

③ 導水路：幅員 1.71～2.00m

高さ 1.60m～2.20m

全長 933.5m

導水路は、隧道591.7m、蓋渠148.3m、開渠193.5mからなる。途中1ヶ所の沈砂池がある。

④ 水路橋：なし

⑤ 建屋：構造

1階木造瓦葺 平屋建

建坪243m²

(6) 特徴

現在稼働している建物では、窪田発電所は、県内最古であり、また特徴的な構造をしている。切妻建物の妻側には、大きな半円アーチ窓が開けられ、洋風のデザインが取り入れられている。また、建物外壁の窓にも小さなアーチがある。壁面の処理と共に大正ロマンを感じる。屋根の3つの排気塔もかわいらしく印象的なアクセントとなっている。

(岡崎秀紀)

<参考文献>

(1) 『佐田町史』1976年

(1) 地勢

豊川発電所に同じ

(2) 地域の概略

豊川発電所に同じ

(3) 立地

発電所：美濃郡匹見町大字匹見字平谷イ1611

取水口：美濃郡匹見町大字道川字黒ミ谷下平口
574番地。他に山の谷・津合谷・岩節谷
の3ヶ所溪流取水がある。

取水口から発電所までの匹見川は、西中国山地国定公園の表匹見峽にあたり、絶壁を背に4kmにわたって滝、奇岩、深淵が連続する溪谷となっている。導水路は、匹見川の左岸沿って隧道が掘られた。

(4) 沿革

昭和3年(1928)、当時の匹見川水力電気工業(株)が二百万円を投じて建設した。

(5) 発電施設**① 発電施設**

発電開始：昭和3年(1928)7月17日

発電所形式：水路式

発電所出力：1870kW

使用水量：2.087m³/s

有効落差：121.17m

発電機1基：東芝製、大正14年(1925)製造

種類：HS型

容量：1750kVA 電圧：6.6kV

力率：0.80 回転数：720rpm

水車 エッシャーウイス社製、大正15年(1926)
製造

形式：横軸フランシス

出力：1400kW

② 堰堤(道川取水ダム)：石張コンクリート重力ダム

堤高4.85m、堤長24.85m

③ 水路：

幅員 1.636m

高さ 1.97m

全長 5722.96m

④ 水路橋：なし**⑤ 建屋：**

平屋建て コンクリート、スレート

建坪 198.35m²

(6) 特徴

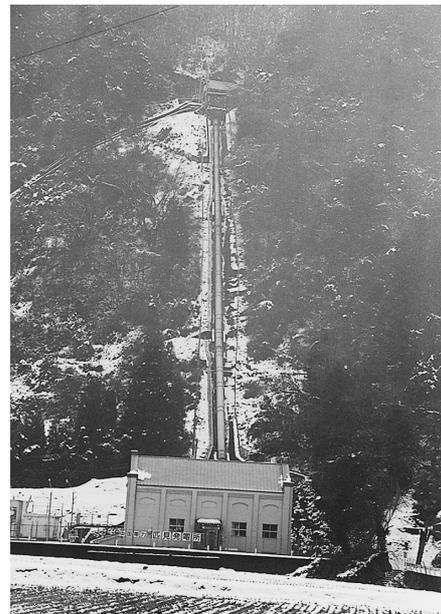
発電所を遠望すると、落差120mの水圧管が山肌を一直線に下りて発電所に達している。建物前は匹見川である。緑豊かな自然の中に、力強さを感じる。発電所放水口より上流に、表匹見峽に沿って進むと、溪谷左岸に沿って約5.4kmの隧道が掘ってある。自然の雄大さと共に、水力利用のための人間のエネルギーの偉大さを感じるのである。前記の発電所の中で、有効落差が一番大きいことも納得できる。今だ大正15年(1926)製造の水車が稼働している。

外観は同年建築された豊川発電所ほど凝った造りではないが、1階窓の四角形構造、2階部のアーチ構造などシンプルに済ませている。内部は鉄骨梁で屋根の野地板を支えている。平側の壁面上部には、今も手動クレーンを見ることができる。

(岡崎秀紀)

<参考文献>

(1) 『石見匹見町史』1965年



中国電力(株)匹見発電所外観(水圧管)

製鉄鑄物業／仁多郡仁多町上阿井／仁多町／昭和10年(1935)頃

所有者 仁多町
構造 1部2階 水車吹子・高炉 約368.66m²

仁多町の中心街・三成から約15km離れた、上阿井の集落をとおり、さらに広島県高野町にむかう国道432号沿いのところにある。近くには阿井川が流れる。

昭和10年、日立製作所安来工場の要請によって、安政4年(1857)鉄師頭取の桜井氏が造った榎原鉦のあった場所に明治40年建造の榎原角炉があったのを再建した。

たたら場は木造2階建て、桁行14.56m 梁行11.83m。軸組は軒高地盤から軒桁までは7.28m、小屋組は合掌作り、屋根は大浪亜鉛引板葺き、炉高11.8m。送風装置は水力を動力源とした4基の鞆。角炉に火入れをすると1～3月連続して操業し、村下2人炭焚き2人、小まわり2人の計6人により12時間交代で15分おきに木炭と砂鉄を挿入した。製品は3時間ごとに廃滓を出したあと、排銑し70×10×10cmの砂鉄の型の中に流し込んだ。製品は大部分安来工場

に送られた。操業は横田町の日立製作所安来工場鳥上分工場とともに昭和20年の終戦まで続けられた。昭和11年～20年までの間、1日約5～7t、合計約4000t以上の銑鉄を生産したという。

木炭銑は、砂鉄を原料に木炭を燃料として洋式製鉄法を取り入れた煉瓦造りの角炉による製鉄法である。操業の度に炉を壊す必要がなく連続操業ができた。量産ができる安価な洋鉄に比べ、和鉄とならび高品質で戦時下であったので兵器材料に使用された。

たたら角炉伝承館は「神話と鉄学の道」事業として桜井家所蔵資料をもとに角炉建屋、水車(上射式日本型水車=径4.8m 幅0.75m、差吹子=長さ1.26m、幅0.41m 高さ0.67m)小屋を忠実に復元した上、作業風景を再現し、写真パネル等を設置したもの。事業費132,500千円。平成5年5月完成。

(勝部 昭)

〈参考文献〉

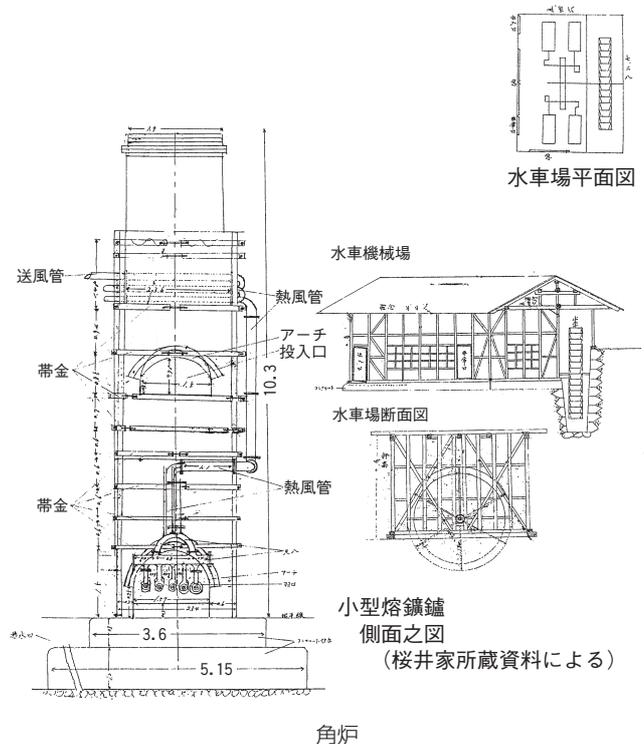
(1)「山陰中央新報平成12.10.3」「桜井家資料」



榎原鉦角炉 (昭和59年撮影)



榎原鉦倉庫 (昭和59年撮影)



角炉

製鉄鑄物業／仁多郡横田町大呂／(株)安来製作所ワイエスエス／大正7年(1918)

所有者 株式会社安来製作所 ワイエスエス
 設計
 施工

構造・形式

横田町は、古くからたたら製鉄が行われ、鉄に関わりの深い土地である。

鳥上木炭銑工場は大正7年(1918)11月、(株)安来製鋼所鳥上分工場として設立され、特殊鋼原材料の木炭銑生産、砂鉄採取、燃料木炭生産等を行った。角炉(1号炉、日産3トン)は耐火レンガ造、小花冬吉博士考案の小高炉で断面長方形であった。昭和9年(1933)、2号炉(日産5トン)増設、戦後の休止後、昭和21年(1946)12月操業再開、昭和27年(1952)6月、2号炉をペタレイジング設備に改修、操業能率を向上した。しかし、諸事情により、昭和40年(1965)9月末、木炭銑生産を休止した。大正7年(1932)～昭和40年(1965)の木炭銑生産55,300トン、砂鉄採取164,200トンであった。(昭和20年(1945)までの木炭銑生産16,300トン、砂鉄採取38,200トンであった。)

鳥上木炭銑工場は鳥根県東南端、鳥取県境近く県道横田伯南線沿いに所在する。敷地内に2基の角炉及び建屋が保存される。建屋は北東に面し、北側に1号炉、南側に2号炉を内蔵する。敷地の傾斜を利用した2階建てで1号炉は木造、2号炉は鉄骨造の複合構造である。内部に、作業員の更衣室、休憩所、浴室跡等が残り、操業時がしのばれる。送風装置は、現在、残されているのは電動式だが、当初は水車軸で水車の残欠や敷地を走る水路を確認した。また、事務所、木炭倉庫や日刀保たたら関連施設が、「鳥上村大呂鑪及製鉄工場建設物配置圖及敷地周圍平面圖」(昭和8年(1933))に近い配置で建ち、歴史的

景観がよく残されている。

角炉はたたらから高炉への過渡期に存在した、和洋折衷の製鉄法であった。鳥上木炭銑工場は、この生産施設が完全な形で保存される日本で唯一の場である。平成8年(1996)、産業考古学会により産業遺産に認定され、平成10年(1998)登録有形文化財となっている。

なお、敷地内には、日刀保たたら関連施設が建つ。これは、昭和8年(1933)、陸軍の外郭団体が建設した靖国たたらを、昭和52年(1977)、(財)日本美術刀剣保存協会がたたら製鉄技術の保存伝承と日本刀材料の供給のため、生産遺構を復元、操業を再開したもので、操業は継続され日本で唯一の和鋼製造技術伝承の場となっている。(小原拓生)

＜参考文献＞

- (1) 『近代遺跡調査報告書－鉦山－』文化庁文化財部記念物課 2002年1月
- (2) 『横田町史』1968年
- (3) 「やすぎ日立の足どり」日本海新聞連載 1982.9～
- (4) 『山陰山陽鉄学の旅』中国新聞社 1994



鳥上木炭銑工場

所有者 大和紡績株式会社

大和紡績株式会社

大和紡績(株)は昭和16年(1941)4月に設立された。企業整備の国策に従い、業界中堅の4社(錦華紡績・日出紡績・出雲製織・和歌山紡績)が対等合併し、本社を大阪市東区に置いた。

出雲製織株式会社

大正8年(1919)11月10日の山陰新聞に出雲製織株式募集の広告が載せられている。主な記事は、「紡機=英国製の最新品式万錘を買い受けた・工場=今市町に決定せるに町民の熱誠なる歓迎を受け、同町より金式万五千円の寄付を受けたる已ならず一坪当たり約式円五拾銭を以て四万坪余買受の契約を了したり。募集=資本金総額参百万円、一株の金額五拾円、申込期間・大正八年十一月十四日迄。」となっている。発起人20名は県内と京阪神の資産家で、創立事務所は大阪市博労町と地元今市町に置かれていた。翌年1月、地元の熱意と期待を担って出雲製織(株)が創立された。

出雲製織(株)の創始者は、地元塩冶村出身の宍道政一郎である。蔵前高等工業教員養成所・紡織科を明治39年(1906)に卒業、大阪織物会社技師長のときピロードの製造研究に英国に留学、帰国後はベッチンや寒冷紗の製法を日本において初めて完成させた功労者であった。

出雲製織設立当初は、取締役会長四方田保、専務取締役社長宍道政一郎、従業員は約400人であったが、島根県一の紡績織布工場であった。間もなく大阪帆布を合併大阪帆布工場とし、同年中央紡績を吸収して事業を拡大していった。

昭和に入ると、宍道スフ工場、石見人絹工場を設立し多角経営に乗りだした。

大和紡績(株)出雲工場

大和紡績に合併時の出雲製織(株)の規模は、敷地54,950坪、建物22,286坪、精紡機146,692錐、織機1,383台であった。間もなく日本は第二次世界大戦に突入したので輸出は激減し、原料は枯渇したが、出雲工場は軍用綿布の指定工場として業績をあげた。

戦後、戦災を免れた出雲工場は電力事情もよく労働力も豊富にあったから、太番手(20番手)生産の主力工場となって大和紡績の原動力となった。昭和25年(1950)の月産高は綿布6万反、綿糸3,460梱、従業員2,835人。原料綿はアメリカ・インドほか5国から輸入し、製品の約60%はアジア諸国に、25%は欧州に輸出している。

昭和40年(1965)代半ば、日本の繊維工業は原料・燃料が高騰して賃金コストの安いアジア諸国製品との貿易摩擦が激化し、工場閉鎖や人員整理が相次いだ。出雲工場では昭和49年(1974)に5億円を投じて超広幅カンバス織機を設備し、経営の多角化を図った。

平成に入っても各地の紡績工場が閉鎖された。大和紡績も紡績事業を縮小し、紡織生産は舞鶴・和歌山・出雲の3工場に集約した。しかし円高と海外縫製品の輸入が続く、ついに出雲工場からも紡織事業を撤収することにした。

現存する工場は木造平屋建て、のこぎり型の屋根で内部は改造されている。元織布部分がカンバス工場に、紡績部分は主に資材置き場に利用している。

(今岡 清)

〈参考文献〉

- (1) 『出雲市誌』1951年
- (2) 『出雲市商工発展誌』出雲商工会議所 1984年
- (3) 『ダイワボウ60年史』
- (4) 『ダイワボウ30年史』大和紡績(株) 1971年



工場内部(昭和2年)現在は使用されていない。

繊維／出雲市塩冶町／出雲グンゼ(株)／大正12年(1923)

所有者 出雲グンゼ株式会社
(元・郡是製糸(株)今市工場)

養蚕業の興隆

島根県における養蚕業は明治22年(1889)から急速に発展した。県は養蚕業を勸業政策上の最重点にして殖産計画をたて、各村に蚕糸組合の設立を勧め、養蚕巡回教授を各地に派遣するなど振興に努めたので、農家の養蚕熱が高まり従来の綿畑や藍畑が桑園に替えられていった。養蚕(蚕座飼育)は重労働であったが、米に次ぐ現金収入となった。

大正4年(1915)から11年間は、日本の蚕糸業は史上最高の発展を遂げた。主にアメリカの生糸(絹衣料)の需要が輸出を支えたのであるが、この間に生糸輸出は数量で2.6倍、金額で5.4倍に拡大した。

島根県内産の繭は、県内の製糸業者や県外の大企業の仲買人に購入されていたが、大正13年(1924)今市町に産業組合繭市場が開設され、競争入札・現金取引によって活況を呈していた。

郡是製糸(株)今市工場の誘致

郡是製糸(株)の本社は京都府何鹿郡綾部町(現綾部市)にある。ここは、奈良時代に絹織物専門の集落が朝廷の保護のもとに栄えていたという。

会社の創立は明治29年(1896)、初代社長は羽室嘉右衛門であった。社名「郡是製糸」の由来は、蚕糸業の振興こそ何鹿郡の急務とすべき事業であり、何鹿郡の「郡是」であると考えた創立委員長波多野鶴吉が起稿した定款案によるという。

島根県が県是として、綾部町の郡是に分工場の誘致交渉を進めた結果、塩冶村(現・出雲市塩冶町)に決定したのは大正10年(1921)で、工場敷地は国鉄山陰本線今市駅に近く、国道に接した約1万坪(約3万3千m²)の水田であった。近くに県立原蚕種製造所(後の蚕業試験場)があった。

製糸業は原料繭と労働力の安定確保が重要課題であった。郡是製糸(株)は小規模の製糸会社等を買収、或いは合併等によって生産規模を拡大してきたが、今市工場は新設第1号であった。当時の簸川郡は県内一の養蚕地帯であり、女子労働力も豊富にあったから、時の簸川郡長、今市町長、塩冶村長らの懸命な誘致運動が実ったのである。

郡是製糸(株)今市工場の盛衰

新設の今市工場は大正12年(1923)2月、128釜で操業を開始した。当年の繭価格は1貫(3.75kg)10円25銭という高価格であった。今市の鑑町および塩

冶の大正町は、郡是工場操業が契機となって形成され新町の名である。

今市工場は、施設・設備を拡充して昭和8年(1933)には釜数540、購入繭約1,380トンとなった。従業員約800人の主な作業は、選繭―煮繭―繰糸―揚げ返―仕上げであった。

やがて日本は第2次世界大戦に突入したので製糸のアメリカ輸出は途絶した。昭和18年(1943)に日本蚕糸製造株式会社(日蚕)が設立され、郡是は今市を含む17の製糸工場を日蚕に移管した。今市工場も事業を縮小して軍需用乾燥野菜を製造していた時期もあった。(戦後、再び郡是製糸に)

終戦後、製糸は再び輸出産業に復活したので、出雲地方でも養蚕業の復活、飼育方法の改良も図られた。しかし、やがて化学繊維が普及、繭価格が低迷して養蚕農家は減少していった。

昭和45年(1970)には本社の製糸部門は戦後最大の欠損を計上したので、集中合理化することになり、出雲工場は出雲グンゼ(株)と変り、アパレル(メリヤス肌着縫製)事業を開始した。こうして翌年9月、出雲工場は製糸の歴史を閉じた。

現存する主な建物は生地の裁断、縫製、仕上げ、編立て工場と食堂、ボイラー室が鉄筋コンクリート造りで延べ面積約3,660m²。事務所、女子寮、倉庫等は木造で延べ面積約3,100m²、改修されているが骨格は製糸創業時のものである。(今岡 清)

＜参考文献＞

- (1) 『出雲市誌』1951年
- (2) 『新修島根県史』1967年
- (3) 『出雲市商工発展誌』出雲商工会議所 1984年
- (4) 『グンゼ100年史』
- (5) 『島根県農業試験場百年史』島根県農業試験場 1979年



出雲グンゼ(株)

繊維／八束郡宍道町佐々布75／オーエム製作所(株)／昭和10年(1935)

所有者 オーエム製作所(株)

オーエム製作所宍道工場は、昭和初期に建築された木造2階建の事務所と鋸刃型の屋根型式の外形を持つ工場、それに附属する建物で構成されている。敷地面積70,475m²、建物面積12,441m²であるが一部関係会社に貸与され、改築もなされている。この工場は、出雲製織株式会社宍道工場として、昭和8年(1933)宍道町の誘致企業として着工され、昭和10年(1935)4月より操業された。当時敷地面積約12万m²(12町歩)に綿紡績5万錘の工場設備により綿糸の製造から始まった。生産高は、1か月綿糸2,500梱をあげ、西脇市の輸出布の原糸として好評であり、会社は業績が大変向上、経営は順調であった。昭和12年(1937)2万2千錘のスフ紡績が増設され、7万2千錘の大工場となり、従業員も1,000名を越え操業が続いた。その後、昭和16年(1941)、国の企業合理化方針に従い、紡績4社が合併し大和紡績が誕生、同社宍道工場と社名変更した。太平洋戦争が苛烈になるに伴い、軍部の要請により紡績を廃止し、昭和18年(1943)軍需産業に切替えた。大和紡績宍道兵機工場と改称、学徒動員等を含め3,000人態勢で魚雷の部品等を生産。

終戦と共に工場も再び転換、大和機械工業(株)として現有の設備を利用し、戦災紡機の修理、製造・自転車の製造を開始した。昭和22年(1947)スーパーハイドラフト精紡機の発明、製造に成功し、順次生産を拡大した。これがオーエム紡機の基礎となり、世界に誇る紡績機械にまで発展することとなった。

昭和25年(1950)オーエム紡機製作所と改名、本格的な精紡機の製造に至った。同年宍道工場内に紡績工場を設置、紡機製造とその紡機を使用する紡績工場が同一構内に併設され、類例のない工場が誕生した。国内の紡績各社は、スーパーハイドラフト精紡機の高性能を認め競って採用したと言われる。昭和27年(1952)にはリオデジャネイロで開催された博覧会に出品し、戦後初めてブラジルに輸出し、続いてインド・パキスタン・台湾・中国・エジプト・フィリピンなどの綿花生産国に輸出した。昭和27年(1952)には、高松宮殿下が親しく工場を参観される

光栄を得ている。昭和31年(1956)にはスフ紡績工場が増設され、綿紡績3万6千錘、スフ紡績2万6千錘、合わせて6万2千錘の紡績工場も稼働した。

昭和30年(1955)代は、紡績工業、繊維機械工業の全盛時代とも言えた。しかし、昭和40年(1965)以降紡績機械の受注も落ちはじめ、一部の施設と従業員は同系列の他社、オーエム電器(コンデンサ製造)とシンジテキスタイル(大和紡績の子会社)に転籍されて操業、今日に至っている。

一方昭和52年(1977)には、オーエム製作所の鋳物工場も独立させ、同一敷地内にオーエム金属工業(株)として発足、工作機械、自動車部品等の鋳物生産を行っている。

オーエム製作所は、繊維機械から工作機械、自動機械の生産に漸次移行し、現在に至っている。昭和初期建築の木造建物は、近代的な機械工場としては使いづらいうところが多く、老朽化も進んできた。平成元年(1989)および4年(1992)に旧建物の一部を取壊し、自動機の組立工場として2棟を新築している。

昭和9年(1934)に紡績工場として建築された木造工場は、幾多の変遷をたどりながら68年後の今日も近代化遺産としての役割を果たし、使用されている。

(犬山英男)

〈参考文献〉

- (1) 『宍道町誌』1963年
- (2) 『技術の足跡50年』オーエム製作所(株) 1996年



オーエム製作所(株) 宍道工場

繊維／鹿足郡日原町枕瀬975／(株)石西社／昭和3年(1928)

所有者 石西蚕糸農協連合会
 設計 不詳
 施工 不詳

有限責任生糸販売購買組合連合会石西社は昭和4年(1929)3月23日島根県鹿足郡日原林大字日原224番地に設立された。

昭和4年(1929)7月22日大字枕瀬字枕瀬国有森林附属地に事務所・工場を建設してここに移った。

敷地面積 4,522ha

職 工 男工10人、女工90人

総 出 資 108口 54,000円

生糸は景気の変動にともない価格の変動がはげしく、昭和3年(1928)～20年(1945)頃までは中小産線製糸はもちろん、組合製糸のなかにもかなりのものが倒産した。

石西社の創立はこのような時期であったから経営はきわめて困難であった。しかし石西社は町村産業組合をもって組織されていたので、信用程度も高く経営を継続することができた。

昭和8年(1933)8月、石西社は島根県蚕業課長原三郎に懇請して原料主任に小山映雄(後に島根県議会議長)を迎えた。小山はこれから昭和25年(1950)1月まで17年間工場長、知事の承認による官選専務

理事として石西社の経営に専念した。

昭和18年(1943)9月1日日本蚕糸統制株式会社が設立され、全国の製糸経営は一本化された。石西社はこれに編入され、日本蚕糸統制株式会社石西工場となった。

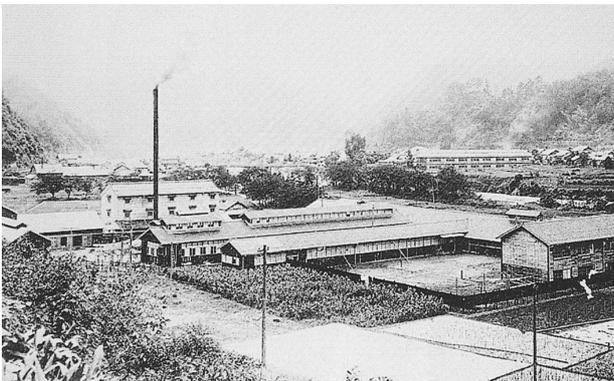
昭和23年(1948)8月農業会の解散とともに、美濃鹿足郡下の養蚕農協1,500人、32組合の熱望によって石西蚕糸農業連合会がつくられ、農業会から製糸事業を引きつぎ石西社が復活した。

昭和54年(1979)11月2日石西蚕糸農協連合会は日原町山村開発センターで創立50周年の記念式典を行った。県知事他の多数来賓があった。

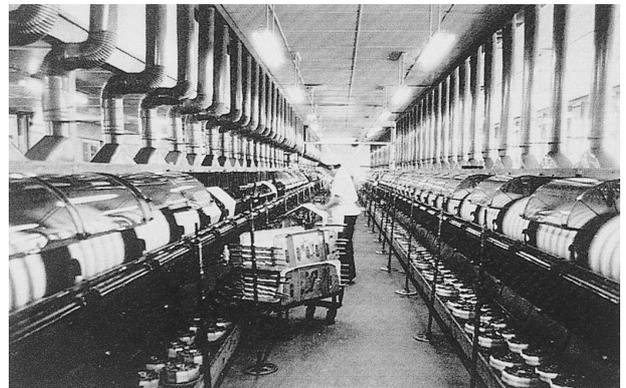
幾多の変遷にともない、養蚕農家の激減によって製糸業は逼塞状態に落ち入る。平成3年(1991)度から赤字経営が続く中で、地元日原町民の石西社の火を消すな切なる願いも空しく、平成7年(1995)12月島根蚕糸販売農業協同組合連合会は、製糸事業を閉鎖し翌年(1996)3月には組織解散、平成8年(1996)3月末第三セクター株式会社石西社に引き継いだ。(村上 進)

〈参考文献〉

- (1) 大庭良美『日原町史近代上巻』1976年
- (2) 大庭良美『島根蚕糸販売農業協同組合連合会石西社史』島根蚕糸販売農業協同組合連合会 1996年
- (3) 大庭良美『日原町農業協同組合史』日原町農業協同組合 1987年



創立当時の石西社



石西社内部

醸造／松江市東茶町／國暉酒造(有)／明治7年(1874)

所有者 國暉酒造有限会社
 設計 不詳
 施工 不詳
 構造・様式 木造・土蔵造

場所と周囲の状況

大橋川北岸、末次の名は、出雲風土記のなか、「須衛都久社」と、ある。

この社は、古く末次村の氏神であると共に、藩主松平氏の産土神でもあったため、地域住民の格別崇拝の社であった。末次界限は、古くから須衛都久社を中心とした農漁の寒村であり、兵火が激しく、戦火に焼かれることしばしばであった。

堀尾吉晴が築城に着工した、慶長8年(1603)頃、橋北一帯は、末次郷と称され、橋南は白潟と称されていた。後に、須衛都久社の湖岸周辺は、下茶町(東茶町)と上茶町(西茶町)となった。茶町と言う名の由来は多設あり、もともと須衛都久神社の境内近くまで宍道湖岸が寄っており、宍道湖からの参拝が多く、この近辺にたくさんの掛茶屋が並んでいたところからという説。茶屋という屋号の富商が住んでいたからという説などがある。

茶町は、松江一住民の多い町であった。当時の屋敷帳によると、藩政末における家数は93軒あったという。

茶町は庶民の町。したがって、東茶町には、西から板屋小路、紅屋小路、羽山小路、新小路など、数多くの小路があった。板屋は材木問屋。紅屋は紅。羽山は白潟本町の伊豫屋のことで、それぞれの借家にちなむものである。

また、茶町という町は昔から一芸に秀でた人物の多いところであった。維新前後には御抱表具師木村栄蔵。つるがやと号し、入墨、表装の名人であった。今日松江の有名な画幅が立派に伝っているのも、つるがやの表装技術に負うところが多い。

そして、木村の養子になった堀磯山は、私立画学校方園舎を開いた。その他、四條派の撫陵、土佐派の伊藤風洋。指物師鈍慶、大谷忠次郎。ロクロ師小林幸八。風流人で俳人松崎昨非坊。そして、世界的な浮世絵家として松江屈指の豪家であった桑原羊次郎又蛙翁などなど、数多くの著名人を輩出した。

そして茶町に隣接する柄屋町は、築城の際、舟運の石材を陸揚げしたところで、古くから船着場とし

て栄えていた。柄屋はタンガラ染三築某の借家があった。因みにタンガラ染めとは、樹皮や草根の汁を用いて色染めをすることである。

成立と経緯

岩橋家は、江戸時代から現在地に於いて廻船問屋、藍染業、水産業など幅広い商いを行い、松江藩の信頼も厚く、名字帯刀も許されていたという。現在の店舗は、文化5年(1808)の大火の際に再建されたものである。

明治7年(1874)、岩橋清次郎が酒造業を創業。松江藩の土蔵を譲り受け、仕込蔵とした。

第二次大戦中は、企業整備により一時休業。昭和21年(1946)、全国に先駆けて、復活運動の本部を置いた。

その結果、松江・八束・能義の9業者で、松江酒造有限会社を設立。昭和31年(1956)には國暉酒造有限会社を設立。翌年、酒名を「國暉」とし、社名を國暉酒造有限会社と改めた。

建物の現況

店舗が道路側にすでに建設されていたので、藩より譲り受けた土蔵は、分解し、宍道湖側からの搬入が行われたものと思われる。そして、藩の何に使用されていた土蔵なのかは判明していない。

大型の梁、桁は数百年の年月を感じさせないほどに頑強である。梁の一部には、当時のものと思われる、墨書がのこされているが判読不能。棟板、棟書き等の確認は出来ていない。(成相 脩)

〈参考文献〉

- (1) 荒木英信編『松江八百八町町内物語白潟の巻』1977年
- (2) 『ふるさと城西』城西ふるさとづくり推進委員会 1994年



國暉酒造

醸造／松江市南田町41／米田酒造／大正7年(1918)

所有者	米田酒造
設計	不詳
施工	不詳
構造・様式	木造・土蔵造

場所と周囲の状況

松江藩が藩財政維持のため、藩営専売機関として設けたものに、木の実方、人参方、釜甌方があった。

木の実方は生蠟の製造、人参方は人参、釜甌方は鋳物の製造を行い、収入は大いに藩の財政を助けた。『松江藩格式と職制』によると「人参方奉行および木の実方奉行。両役所とも御趣向役所にして、すでに人参（薬用人参）のためには年々御利益ある事になりて、一廉の御金役所といひし。元来この人参の栽培且つ製造方その販売先等、これまで肥前長崎において専らその取引有りて、その製法の行はれ開けし起りよりして、漸々この役所の成立しは誰人の元尽力。（中略）

また木の実方も同様、元木実は俗に「ごろた」と申し、桐油従前は灯油を絞られし一方、蠟の実をして蠟を絞り蠟燭を製造せられ、同役所も古く御利潤あるに至り御金役所と旧来申せし。一節に御家中へも月々蠟燭および明し油をば、代金をもって御払渡し相成りいたるにあり。この木実方の成立その起こりをも探索中。前県史、市誌の側において何か手に入りし好材料はこれ無きや。野間忠太夫の家に木実方に関係云々あるや申しいたるとか。これも近來松江におらずその尋ね方に窮しおり候。両役所とも奉行は一人づつ、添奉行・押合これ等は組付役、内改以下計吏・元メ・下役人、その他製法・製造等について要する事あらば聞込みの上は、両役所の位置その場所について記す事もあるべし。」とある。

このうち、木の実方の役所が南田町にあった。それまでの菜種油の灯油に代わって登場した蠟燭は、当時の生活の必需品であった。それを藩営専売にしたのであるから、松江藩の利益は大きかった。藩の御細工所での蠟燭製造が本格的になったのは、延享4年(1747)からであった。蠟燭の原料であった蠟の実は、宝暦11年(1761)には、約16アールに5万本が植えられ、主産地は松江市周辺であった。初年度(延

享4年(1747))の買い上げ蠟実は、一万貫に達したという。そして3年後の宝暦元年(1751)には、5.4m×28.8mの蠟打場と、5.4m×16.2mの土蔵を持った、木実方役所を南田町に新設した。

成立と経緯

米田酒造は、明治29年(1896)松江市東本町に、米田金五郎によって創業。昭和30年(1955)、これまで松江藩木の実方、木蠟作業場として使用されていた蔵を隣接する醸造工場に利用するために買い受けた。

木の実方作業場として使用されていた蔵は、東西に長く建っていたのだが、同年完成した大輪町通りに並行する形で、隣接する工場敷地に、南北に家引き、移築したという。移築の際、木の実方作業蔵からは、古い庭や池の遺構が発掘されたという。木の実方として使用されるまでのこの敷地が、いずれかの屋敷跡ではなかったかと思われる。

建物の現況

木造瓦葺、土蔵造り。外部は漆喰塗り。移築当時そのままの状態でも現在も使用。平成13年(2001)には、外部漆喰その他の修理も行い、現在は真新しい姿を見せている。古いものを大切にす所有者の建築に対する思いが伝わる建物だ。敷地内にある、レンガ造の煙突も、昭和30年(1955)頃のものである。本格的なイギリス積みレンガは、整然として美しい。

(成相 脩)

＜参考文献＞

- (1) 中原健次著『松江藩格式と職制』松江今井書店 1998年
- (2) 荒木英信編『松江八百八町町内物語白濁の巻』1977年



米田酒造

醸造／松江市石橋町393／(合)森山勇助商店／明治8年(1875)

所有者 合資会社森山勇助商店
 設計 不詳
 施工 不詳
 構造・様式 吉野杉

場所と周囲の状況

石橋町は、この名の示す通り、かつて石橋入り口に、奥谷川をまたがる大きな石の橋が掛かっていた。この橋は、江戸時代の古文書に「石橋町入口橋、壱間に五尺」と記されている。

『新修松江史誌』によると、「西原川、北堀川の北部を城北と総称す。もと亀田山の北地続きであった。赤山、西原山、宇賀山、千手院山その他の小丘陵起伏し、其の間に谷、又は支谷をも派生し、複雑なる地形を為して、北堀、奥谷及び石橋の三町を分かち、概ね古く諸侍以下の住宅地であって、庶民は一般に石橋町本通りと、北堀川北岸に集まり、其の他は、之等各々一部に点在していた。」とある。

石橋町は庶民の町といわれ、藩政時代、縁の下の力持ちであった職人、町人の町である。

現在の石橋四丁目あたりを、かつては「縄手」と呼んでいた。正保年間の古図では、「縄手町」と記されている。この縄手町界隈は、古くから良い水が得られるところであった。石橋四丁目入り口には大井戸が現在も残り、この隅に小さな祠があり、そこに「文久三年七月」と記されており、この井戸は幕末頃に掘られたものであることがわかる。当時の井戸は、主に飲料水を確保するためのものであったのだろう。しかし、江戸時代の松江は、大火が多く、この井戸が掘られる40年前にも、石橋地区で142戸を焼失するほどの大火に見舞われていることや、世が幕末という騒然とした時代であったことを考えると、その他に、非常の際の用途もあったのではないだろうか。

また、重量のある米や大豆を原料とする醸造会社や豆腐屋には、運送の手段としての水路が縦横に走っていたというのも、この地に集積した大きな要因ではなかったのだろうか。

宍道湖、大橋川に大船で集積された原料は、小船に移し、市内の堀川を利用して石橋へ運ばれた。

現在でも酒造会社や水を利用する豆腐屋が数件並んでいる。

成立と経緯

初代森山勇助は、明治8年(1875)にこの地で創業。工場建設と同時に醸造桶を設置、今にいたる。

桶の材質は、吉野から取り寄せた吉野杉といわれており、操業当初から絶えることなく使用されてきた。桶の中は、操業当初から一度も空にしたことは無い。一旦、桶を空にすると、桶を作っている杉材が乾燥し、その途端に崩壊すると伝えられ、代々絶やすことの無い努力が続けられてきた。

また、醤油を作るときに使用する、麹菌は工場内部、いたるところで繁殖している。これも、建物内部に付着した麹菌をそのまま使用するため、操業当初からの麹菌が代々生き続けていることになる。

現況

吉野杉で作られた仕込み桶は、現存する数80。桶の口先までかさ上げされた床には、一面にむしろが敷き詰められ、建物内部には分厚い麹菌が付着している。

直射日光を控えた仕込み室に並ぶ80もの桶。常に、満々とたたえられた原料から出る気泡は、百数十年桶と麹菌の生きてきた証なのだろう。(成相 脩)

〈参考文献〉

- (1) 『わがまち城北』城北地区ふるさとづくり推進委員会 1994年
- (2) 『新修松江史誌』1962年



森山醤油醸造桶